豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

１９８３年度

1984年３月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

１９８３年度

1984年３月

豊中市教育委員会

序　　文

豊中市は、大阪府の北西部に位置し、大阪のベッドタウンとして、戦後、急速に成長してきた町であります。

本市は緑なす千里丘陵と猪名川によって育まれた沃野にあり、安定した生産基盤と自然に恵まれて栄えた悠久の地であります。

しかし、近年にみる開発はとどまるところなく、一層激しく、土地を、景観を、変貌させています。

開発と保護、これは古くて新しい問題であります。私達は先人の文化遺産を謙虚に受けとめ、十分に認識し、現代の社会に活かしていかなければなりません。

この報告書は、以上のようなことを踏まえ、危機に直面している遺跡について、国並びに大阪府の援助を受けて実施した調査の概要報告であります。この調査で得られたものは微々たるものですが、この作業を繰返すことにより点が面となり、先人のくらしぶりが明らかにされ、現代社会に活かされる日がくることを確信しています。

なお、調査にあたっては、多くの御指導をいただいた諸先生をはじめ、土地所有者の方々には文化財の重要性を御理解いただき、積極的に御協力いただきました。また文化庁、大阪府教育委員会並びに関係機関には格別の御指導と御協力をいただきました。こうした関係各位からの御協力に支えられて、文化財行政がより一層押し進められることに対し、関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。

昭和59年３月31日

豊中市教育委員会

教育長　湯元英世

例　　言

1．本書は豊中市教育委員会が昭和58年度国庫補助事業(総額3,000,000円、国庫50%、府費25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告書である。

2．本年度の調査は新免遺跡（５個所）蛍池北遺跡の二遺跡について実施した。調査は昭和58年６月22日から昭和59年３月31日までの間、発掘調査並びに整理作業を行なった。

3．本書の執筆は下記の者が分担して行なった。

新免遺跡	Ⅰ～Ⅱ	柳本照男
	第４次調査地点	服部聡志
	第６次調査地点	柳本照男、田上雅則
	第７次調査地点	柳本照男
	第８次調査地点	柳本照男
	第９次調査地点	小嶋久夫
蛍池北遺跡	第２次調査地点	橋本正幸、中村のり代

4．遺物写真、編集は柳本が相当し、服部聡志の協力を得た。

5．調査の進行にあたって、豊中市文化財保護委員藤沢一夫氏、また亥野彊氏より、御指導、助言をいただいた事に対して感謝いたします。

本　文　目　次

新　免　遺　跡

Ⅰ　はじめに……1

Ⅱ　周辺の遺跡……2

Ⅲ　調査の概要……3

第4次調査地点……3

第6次調査地点……10

第7次調査地点……17

第8次調査地点……18

第9次調査地点……21

蛍池北遺跡（第2次調査地点）

Ⅰ　調査の経緯と地理的環境……26

Ⅱ　調査の概要……27

Ⅲ　要　約……31

挿　図　目　次

第１図　各調査地点位置図……1
第２図　周辺遺跡分布図……2
第３図　第４次調査地点トレンチ配置図……3
第４図　第１－２トレンチ平面図……4
第５図　第４次調査地点　出土遺物実測図……6
第６図　第４次調査地点　出土遺物実測図……8
第７図　第４次調査地点　出土遺物実測図……9
第８図　第６次調査地点トレンチ配置図……10
第９図　各トレンチ平面図・断面図……11
第10図　ＳＫ－02平面図・断面図……12
第11図　第６次調査地点　出土遺物実測図……13
第12図　第６次調査地点　出土遺物実測図……14
第13図　第６次調査地点　出土遺物実測図……15
第14図　石器実測図……16
第15図　第７次調査地点トレンチ配置図……17
第16図　第１トレンチ平面図・断面図……17
第17図　第８次調査地点トレンチ配置図……18
第18図　第３トレンチ平面図・断面図……19
第19図　第８次調査地点　出土遺物実測図……20
第20図　第８次調査地点　出土遺物実測図……21
第21図　第９次調査地点トレンチ配置図……22
第22図　第９次調査地点平面図・断面図……23
第23図　第９次調査地点　出土遺物実測図……24
第24図　石器実測図……25
第25図　第９次調査地点　第２トレンチ遺構検出状況……25
第26図　調査地点位置図……26
第27図　層序断面実測図……28
第28図　第２次調査地点平面図……28
第29図　第２次調査地点　出土遺物実測図……32

図　版　目　次

図版１　新免遺跡・第４次調査地点
(1)　第１－２トレンチ遺物出土状況
(2)　第１－２トレンチ井戸検出状況
図版２　新免遺跡・第６次調査地点
(1)　第２トレンチ遺構検出状況
(2)　調査地近景
図版３　新免遺跡・第６次調査地点
(1)　ＳＫ－02断面状況
(2)　ＳＫ－02遺物出土状況
図版４　新免遺跡・第７次調査地点
(1)　トレンチ配置状況
(2)　第１トレンチ遺構検出状況
図版５　新免遺跡・第８次調査地点
(1)　調査地近景
(2)　グリッド配置状況
図版６　新免遺跡・第８次調査地点
(1)　溝状遺構内遺物出土状況
(2)　溝状遺構検出状況
図版７　新免遺跡・第９次調査地点
(1)　調査地近景
(2)　遺構検出状況
図版８　蛍池北遺跡・第２次調査地点
(1)　遺構検出状況（平面）
(2)　遺構検出状況（南方向から）
図版９　新免遺跡第４次調査地点出土遺物
図版10　新免遺跡第４次・第６次調査地点出土遺物
図版11　新免遺跡第６次・第８次調査地点出土遺物
図版12　新免遺跡第９次調査地点出土遺物

新　免　遺　跡

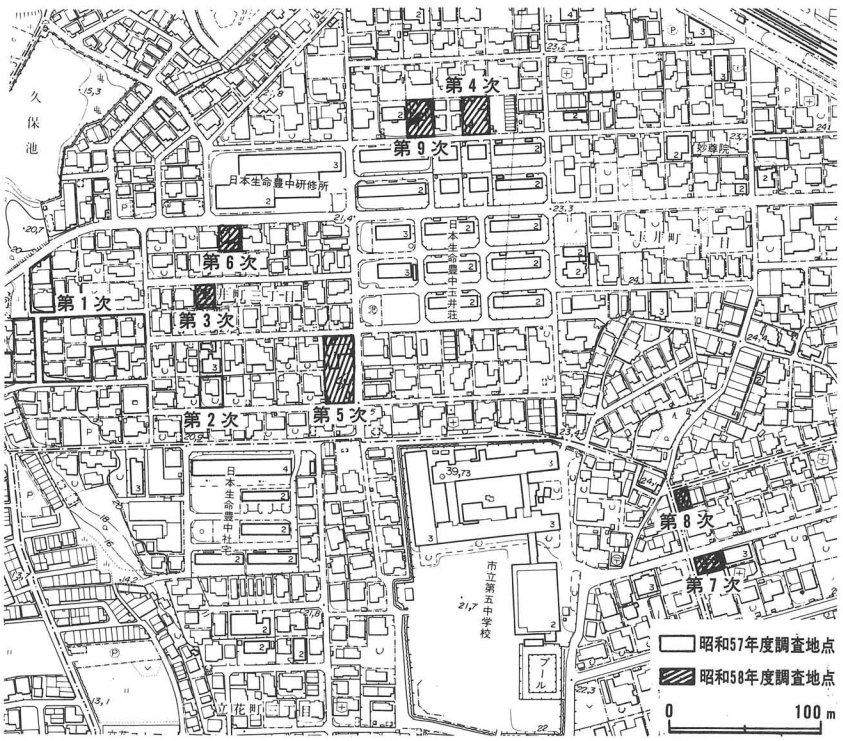
Ⅰ．は　じ　め　に

新免遺跡は阪急豊中駅の西方一帯に広がる弥生時代中期から江戸時代に至る複合遺跡である。その中でも、特に古墳時代後期の遺跡範囲が大きく広がっている。

この地域の宅地開発は古く、現在では老朽化し、建替えが多くなってきている。遺跡は台地上に立地しているため、遺構面までの深さはそれほどなく、木造住宅の基礎工事でも十分壊される恐れのある所もある。

このような状況の中で、今回の報告は昭和58年度の緊急調査として実施したものであり、それぞれの調査地点のものを一括して報告するものである。

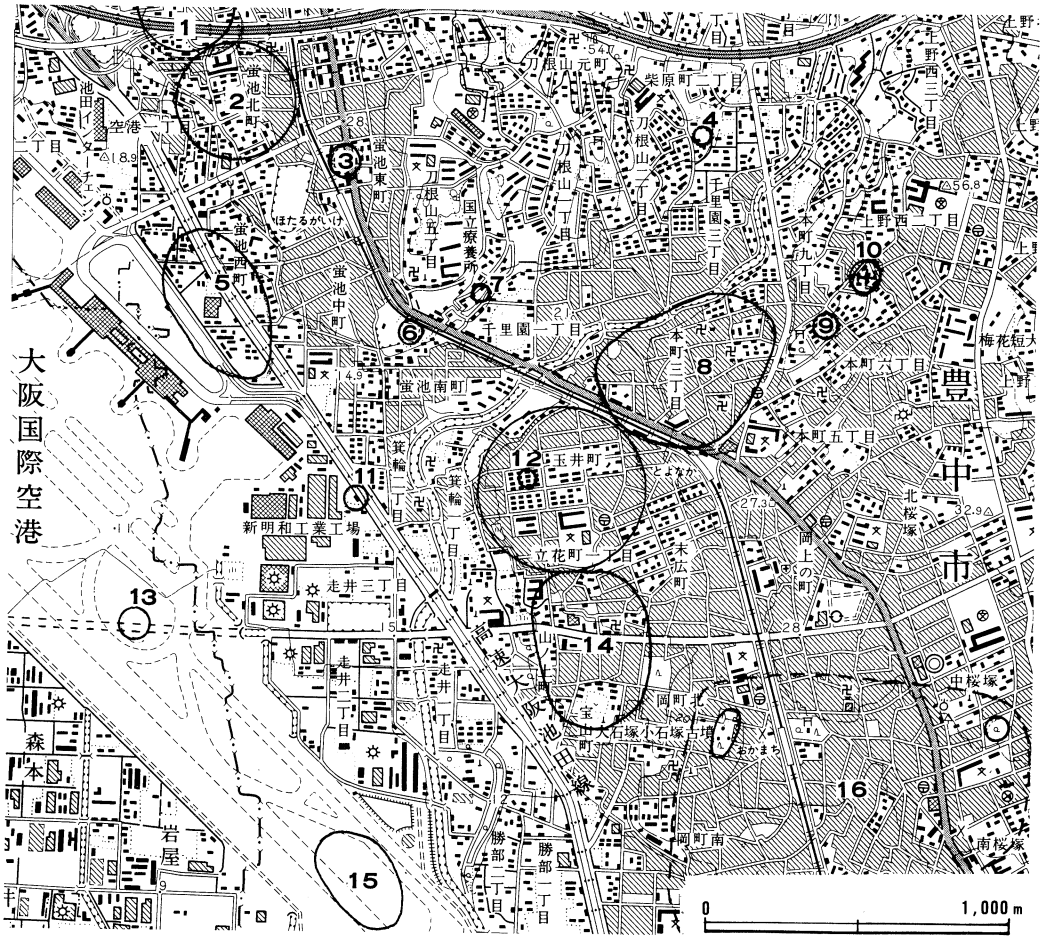
第４次調査地点	玉井町２丁目179番地	昭和58年６月22日～昭和58年７月１日
第６次調査地点	玉井町３丁目22番地	昭和58年９月26日～昭和58年10月15日
第７次調査地点	末広町１丁目109番地	昭和58年10月１日～昭和58年10月８日
第８次調査地点	末広町１丁目107－1.2番地	昭和59年２月６日～昭和59年２月14日
第９次調査地点	玉井町２丁目181－６番地	昭和59年１月19日～昭和59年１月30日



第１図　各調査地点位置図

II. 周 辺 の 遺 跡

新免遺跡は豊中市玉井町３丁目付近一帯に広がる弥生時代から近世に至る複合遺跡である。遺跡は千里丘陵から派生する通称豊中台地の一支丘陵上の先端部に立地している。北側は千里川が流れ、西方は西摂平野の低地部が開けている。この台地上には、多くの遺跡が存在する。東方には本町遺跡、新免宮山古墳群、金寺山廃寺遺跡と続き、南方は山ノ上遺跡、桜塚古墳群、原田遺跡、曽根遺跡などがある。北方は千里川を挟んで、御神山古墳、刀根山壺棺出土地、蛍池東遺跡、蛍池北遺跡、宮ノ前遺跡などがある。一方西方の低地には、箕輪遺跡、蛍池西遺跡、空港Ａ・Ｂ地点、勝部遺跡、田能遺跡と著名な遺跡が存在する。いわゆる西摂平野東部の中心地帯である。



1. 宮ノ前遺跡
2. 蛍池北遺跡
3. 蛍池東遺跡
4. 柴原遺跡
5. 蛍池西遺跡
6. 御神山古墳
7. 刀根山壺棺出土遺跡
8. 本町遺跡
9. 新免宮山古墳群
10. 金寺山廃寺
11. 箕輪遺跡
12. 新免遺跡
13. 空港Ｂ地点遺跡
14. 山ノ上遺跡
15. 勝部遺跡
16. 桜塚古墳群

第２図　周辺遺跡分布図

III. 調 査 の 概 要

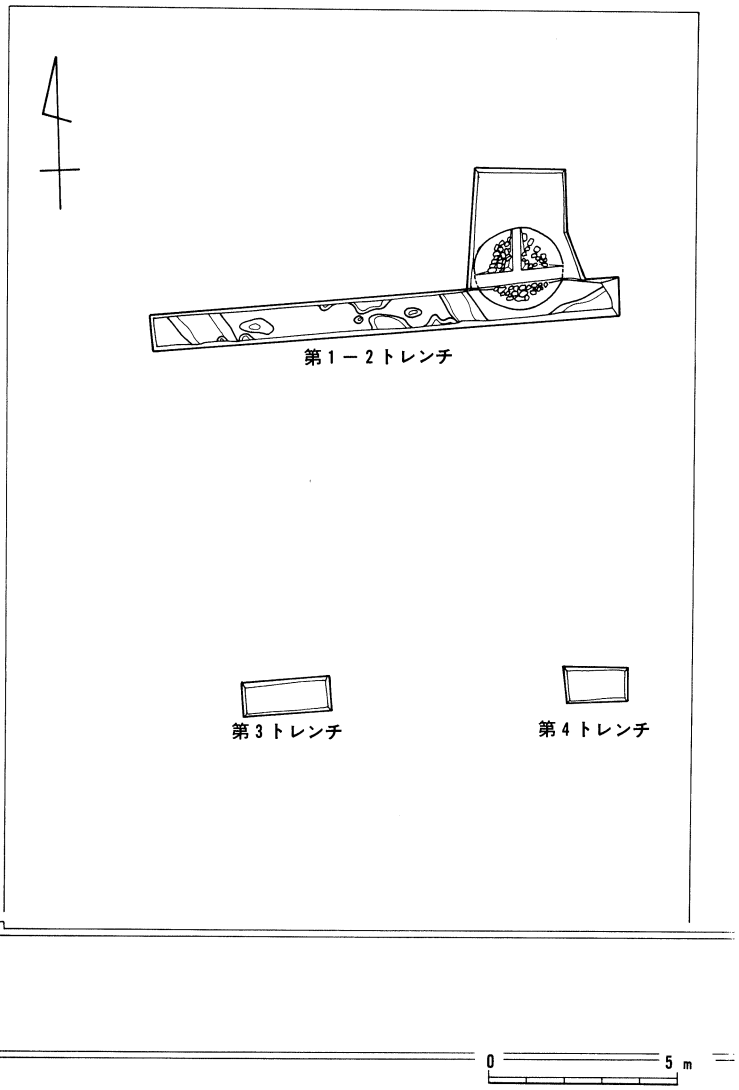
第４次調査地点

調査地点は豊中市玉井町２丁目179番地に所在する。当初、敷地面積450㎡の範囲内に１ｍ×３ｍのトレンチを東西に２本づつ平行に、計４本設定した。調査の結果、遺構は北側の第１・２トレンチにおいてのみ検出されたため、その間を拡張し第１－２トレンチとした。また第２トレンチで井戸の肩を検出したため、一部を北側に拡張した。

１ 各トレンチの概要

第１－２トレンチ

基本層序は４層からなる。第１層は粘土ブロックを含む暗褐色粘質土で、瓦礫を多量に含んだ近代以降の整地層である。第２層は青灰色砂質土で、少量ではあるが陶磁器片が含まれることから、近世以降の堆積土と考えられる。第３層は弥生土器、須恵器、土師器等、長期に亘る遺物を多量に含んだ茶褐色粘質土である。遺物の出土状況から見る限り、明らかに整地に伴う攪乱土と見られる。またこの層の上面は近世の遺構面に相当し、井戸ＳＫ－03を検出した。第４層も基本的には第３層



第３図　第４次調査地点トレンチ配置図

と同様、弥生土器、須恵器、土師器を多量に含んだ攪乱土である。これより下層は明黄褐色粘質土を基調とする地山となり、この上面に溝、ピット等の各種遺構を検出した。明確に遺構に伴う遺物は出土しなかったが、第３・４層出土の遺物から遺構の大半は古墳時代後期に属するものと推定される。ただし各遺構の深度は概して浅いため、整地の際に上部がある程度削平を受けたものと考えられる。この整地の時期は概ね７世紀代と推定される。

第４図　第１－２トレンチ平面図

古墳時代後期に属するものと推定される遺構として、溝３、小ピット２、大小の不整形土坑８がある。ＳＤ－01は幅1.04ｍ、深さ０.4ｍで断面Ｕ字状をなし、走向方位はほぼＮ－45°－Ｗである。埋土は２層に大別されるが、上層の攪乱土を除くと、下層からは遺物はほとんど出土しなかった。ＳＤ－02は深さ約20cmを測る。ただし北側の肩しか検出しなかったため幅については不明である。埋土は第４層と同様、各時期の遺物を含む攪乱土である。その他、各ピット、各土坑はいずれも深度が浅く、遺構に伴う良好な遺物にも恵まれなかった。さらに調査面積も極めて限られたものであったことなどから、これら各遺構の性格については現時点では明確にし難い。ただ上部攪乱土中出土の遺物は、少量の弥生土器を除くと大半が須恵器であり、多くが古墳時代後期の一定期間に属するもので占められることなどから、上記各遺構の時期をある程度示唆するものと考えられる。

近世の遺構として井戸ＳＫ－03がある。平面は円形状を呈し、掘り方上面の規模は東西2.4ｍ、南北2.1ｍを測る。大きく２段に掘り込まれ、

上部はすり鉢状、下部は円筒状を呈する。石組は径10～20cm大の角礫を積み上げたもので、東側はかなり崩れていたが、西側は比較的良好に遺存していた。完掘しなかったため内部の規模は明らかにし難いが、およそ直径60cm、深さ70cm以上を測るものと推定される。埋土からは攪乱を受けたと見られる須恵器片が多数出土し、それに混じって石組上面より磁器椀の破片１点（第７図12）が出土している。

第３、４トレンチ

両トレンチとも、基本層序は第１－２トレンチと同様、概ね４層からなる。第３層上面および地山上面のいずれにも、明確な遺構は認められなかった。遺物は大半が第３・４層から出土し、弥生土器、須恵器、土師器の破片多数がある。このうち第４トレンチ第３層において、上記各遺物に混じり、円筒埴輪の破片１点が含まれていた。

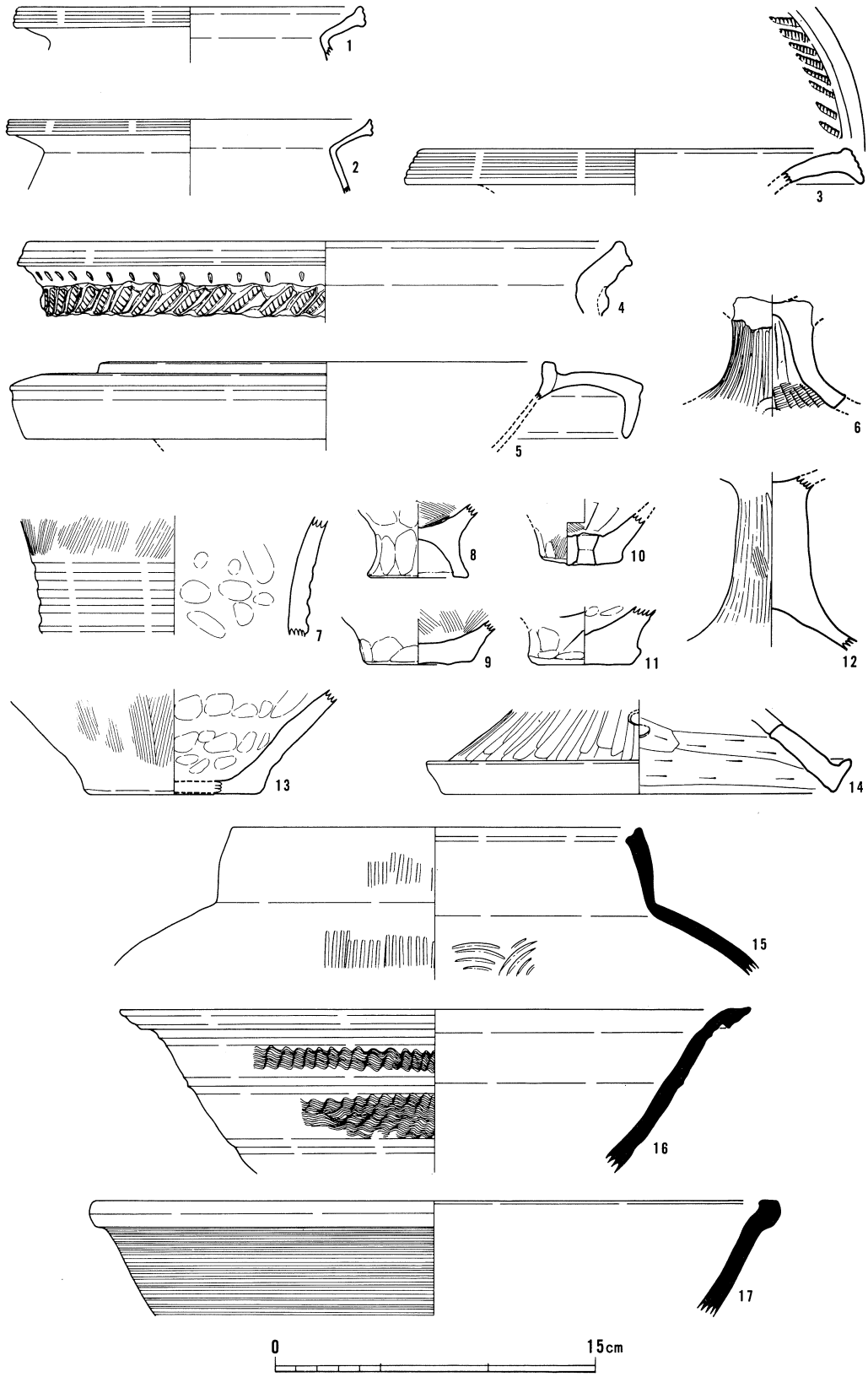
2 出土遺物

ここでとりあげる遺物は、大半が第１－２トレンチ第３・４層の攪乱土より出土したものである。その他、ＳＫ－05埋土内、井戸石組上面、第４トレンチ第３層出土のものについても述べる。

弥生土器（第５図１～14）　甕、壺、高杯、器台の各破片がある。１、２は甕の口縁部で、それぞれ口径16.8cm、16.0cmを測る。いずれも口縁端部を若干つまみ上げぎみに引きのばし、端面には２条の凹線を走らせる。３は壺の口縁部で、口径19.6cm。端面に４本の凹線、端部内面には列点文を施している。４は甕の口縁部で、口径27.2cmを測る。「く」の字状に短く外反し、外面にはヘラによる刺突文、その直下にハケ状工具による押圧を加えた突帯を施している。５は高杯の杯部で、口径20.0cm。口縁部は水平にのび、端面は幅広く垂下する。また端面上部には一条の凹線を施している。６は高杯の脚部で裾部は大きく広がり、４方にスカシ孔を有する。外面はヘラ磨き、内面は断続的なハケによる調整が施され、上部にはシボリ痕が残る。７は器台の胴部と推定される。外面に４条以上の凹線が施され、上部はハケ調整である。８は脚台部で、底径4.6cm。外面は指頭調整、体部内面はハケ調整が施される。９～11、13はいずれも底部破片である。10は外面をハケ、内面をハケのちナデにより仕上げられ、底部に焼成前の穿孔が施される。なお、６・10はＳＫ－05埋土内出土のものである。13は底径８cmを測り、外面にハケ、内面ナデにより調整している。12は高杯の脚部で、中実のやや長い脚柱部を有し、外面ハケのちヘラ磨きの痕跡を残す。14も高杯の脚部で底径18.0cmを測る。裾部は大きく広がり、端部は強く上方につまみあげ、幅広のやや凹んだ端面をなしている。スカシ孔が施されるが、破片のため方向は不明である。外面は粗いヘラ磨き、内面は横方向のシャープなヘラ削りが施される。

須恵器（第５図15～17・第６図　第７図１～10）

蓋杯（第６図１～19）　杯蓋は大半が口径11.4cmから13cm前後におさまるが、１のように口



第 5 図　第 4 次調査地点　出土遺物実測図

径17.0cmを測る大型のものもある。天井部と口縁部を界する稜は、いずれも比較的シャープに仕上げられている。また口縁端部内面の段も顕著で、明らかに凹線をなすものもある。ただし8のみは稜、段ともに認められず、全体として純い感を与えるものである。一方、杯身には、立ち上がりを有するもの、立ち上がりを有しないもの、およびそれに高台を付したものがある。立ち上がりを有するものは、口径11.4cmから15.5cmとやや幅をもち、各部の形状、成形等に差異が認められ、若干の時期差を示すものと見られる。また立ち上がりを有しないものは、その形態から明らかに数型式下るものである。なお14の底部には三角形のヘラ記号が施されている。

高杯（第6図20・21、24～26、第7図1～4）いずれも破片で全体の形状を捉えにくいが、それらの特徴から有蓋、無蓋、および長脚、短脚のものに分けることができる。第6図20・21は有蓋高杯のつまみの破片である。有蓋短脚高杯の脚部はスカシ孔の方向に3方と4方の二種があり、脚端部の形状にも差異が認められる。また長脚のものではスカシ孔を有するものと有しないものがある。そのうち第7図4は生焼けの状態を示す。なお1点のみ無蓋高杯の杯部の破片があり、体部に密な波状文が施される。

壺（第7図5）　頸部から口縁部にかけての破片である。口径11.5cm。内面は大きく段をなし、口縁端部内面にはナデによる深い凹線が走る。また頸部外面には密な波状文が施される。

提瓶（第7図8）　口縁部を欠くが、扁平な円球状の体部を有する。外面をカキ目、内面はユビナデにより調整され、肩部には把手の名残りと見られる円形浮文が付されている。

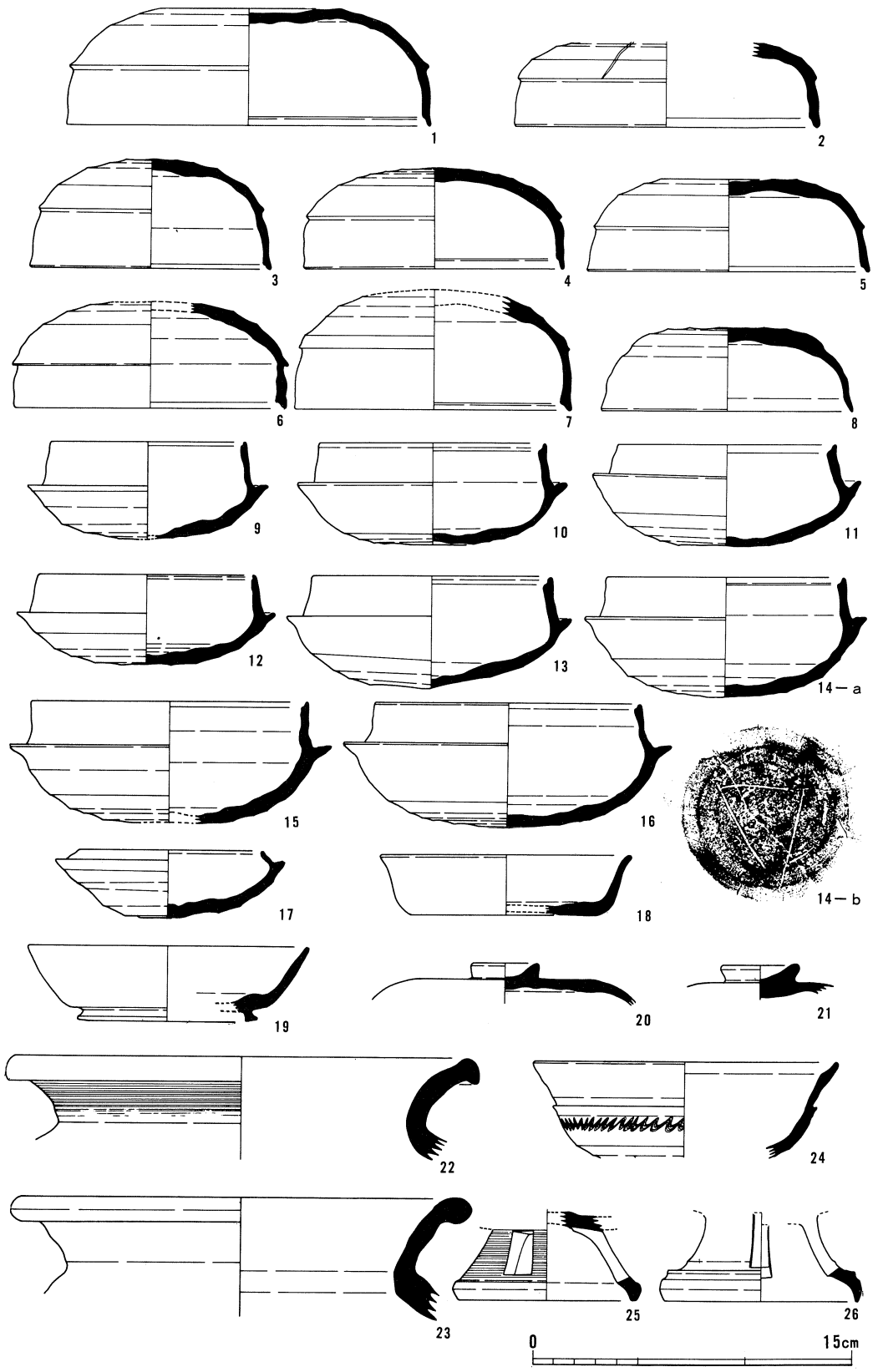
短頸壺（第7図10）　口径9.8cm。頸部は短く直立し、肩部の張りはゆるやかで、底部はやや平担につくられる。肩部外面にカキ目が施される。

器台（第5図16、17）　16は口径26.4cmを測り、大きく開く体部より口縁部がやや外反する。体部外面には鈍い凸線、および凹線が施され、その間を密な波状文で埋める。17は口径31cmを測り、体部外面には一面にカキ目が施される。

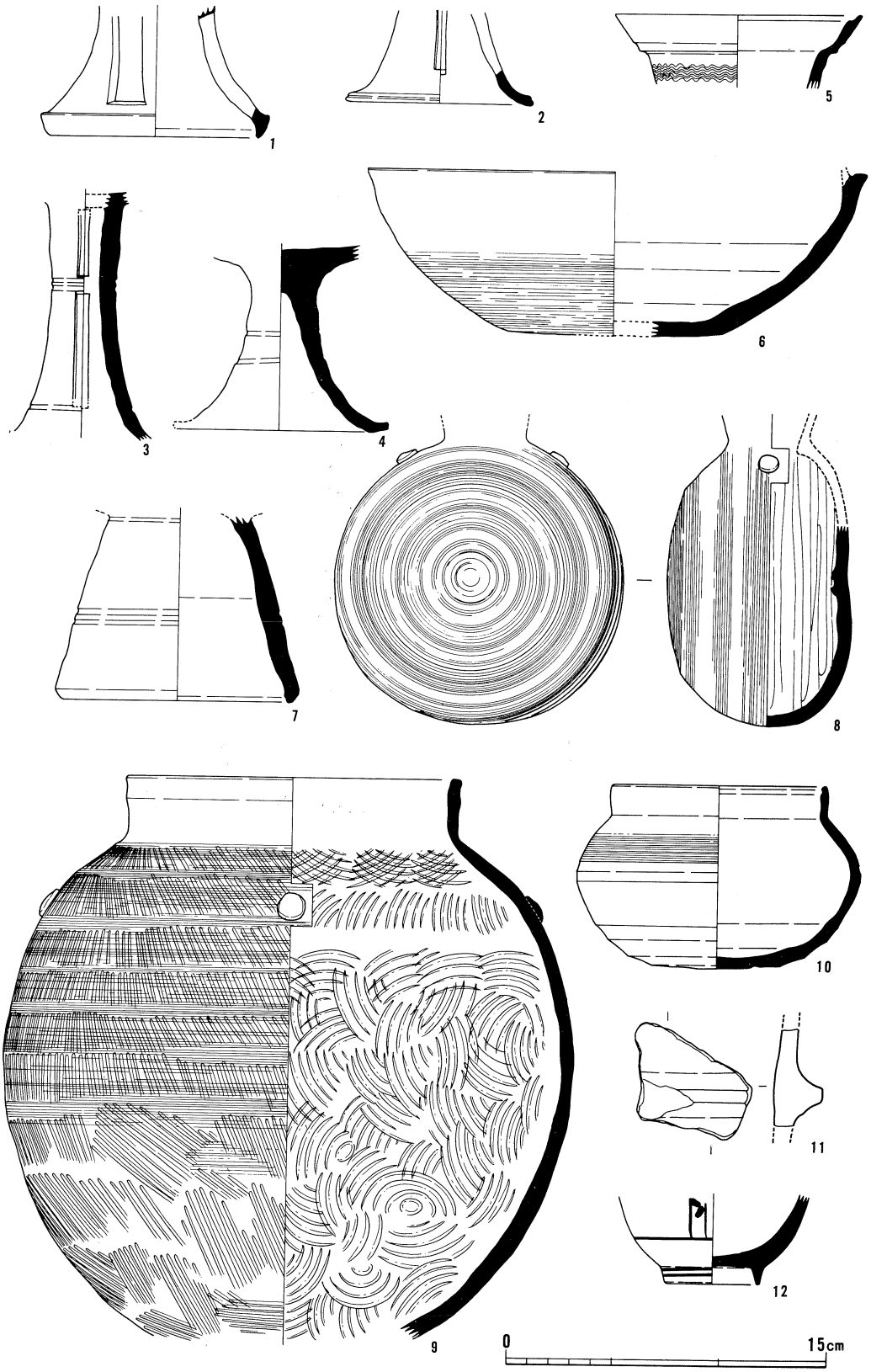
甕（第5図15、第6図22、23、第7図9）　口縁部の形態にもとづいて、「く」の字状に外反するもの、直立あるいは内傾する短い口縁部を有するものの二種に分けることができる。前者（第6図22、23）はともに口径21cm前後を測り、口縁端部を丸く肥厚させ、23の口縁部外面にはカキ目が施される。後者のうち第7図9は口径15.2cmを測る。肩部の4方向に円形浮文が付され、外面は平行タタキのちカキ目、内面は同心円のタタキが施される。

以上の他　全形は判明しないが受部径23.2cmの鉢形を呈するもの（第7図6）がある。丸い体部に平底を有し、体部外面にはカキ目が施される。口縁部付近の形状は杯身の口縁部に類似し、受部状の張り出し、および立ち上がり部の欠損と見られる剝離面が認められる。また上部の形態は明らかでないが脚台部（第7図7）がある。底径10.5cmを測り、内外とも回転ナデ調整が施される。

その他の遺物　円筒埴輪の破片1点（第7図11）が第4トレンチ第3層から出土している。内外面とも磨滅のため調整は明らかではないが、断面台形の比較的しっかりとした突帯を有す



第６図　第４次調査地点　出土遺物実測図



第 7 図　第 4 次調査地点　出土遺物実測図

る。また磁器碗（第７図12）は第１－２トレンチ井戸石組上面より出土した。底径4.3cmを測り、外面には呉須による圏線および草花文と見られる文様が施される。

以上のように、第４次調査地点の出土遺物は大半が第３・４層より出土し、明らかに二次的に攪乱を受けたものである。それらの特徴についてまとめるならば、弥生土器はいずれも中期ないし後期に属し、第２次調査地点の出土遺物と合わせ、当該地域における弥生集落の存在を窺わせるものである。[註1] また出土遺物の大半を占める須恵器は、報告にとりあげたもの、およびその他の破片の中にかなりの高率で生焼けの状態を示すものが含まれる点が注目される。これについては同年12月に調査を実施した本町遺跡において、出土須恵器の中に多量の焼け歪み、生焼けを示す製品が含まれ、当調査地点との位置的な近接性をも絡め、両者の関連に興味がもたれるところである。なお、今回出土した須恵器の多くは、当調査地点周辺に位置づけられる桜井谷窯跡群編年試案[註2]によるＩ型式第３段階ないしII型式第２段階に属し、当調査地点を含む、古墳時代集落の中心をなす時期の１点を窺うことができよう。

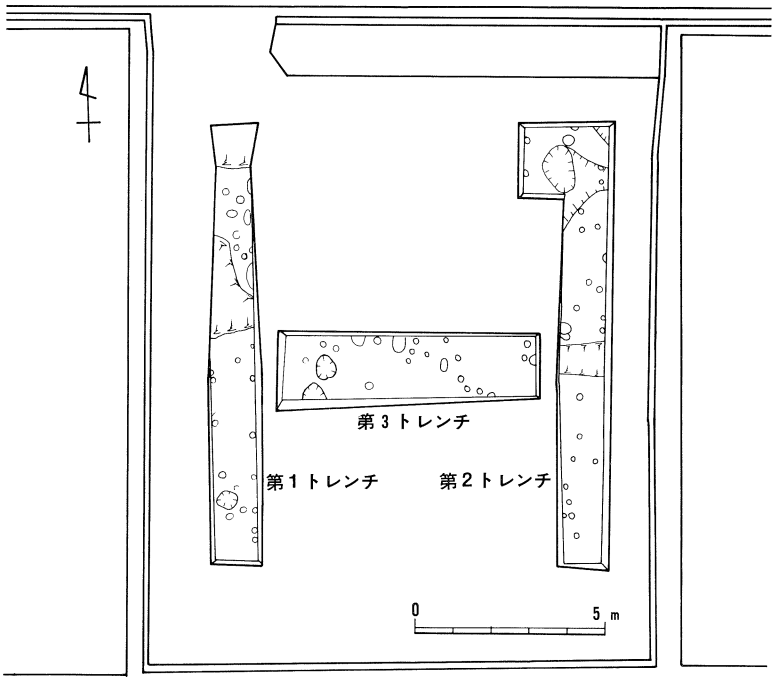
註１　「新免遺跡」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1982年度　1983年３月　豊中市教育委員会
註２　木下亘「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」『桜井谷窯跡群２－17窯跡』1982年12月　少跡窯跡遺跡調査団

第６次調査地点

第６次調査地点は豊中市玉井町３丁目22番地にあたる。当地点は台地の北側縁辺部、標高約21ｍに位置している。北側に進むに従って緩やかに傾斜し、谷間を流れる千里川へと移行する。調査範囲内にトレンチをＨ字形に設定し、行なった。

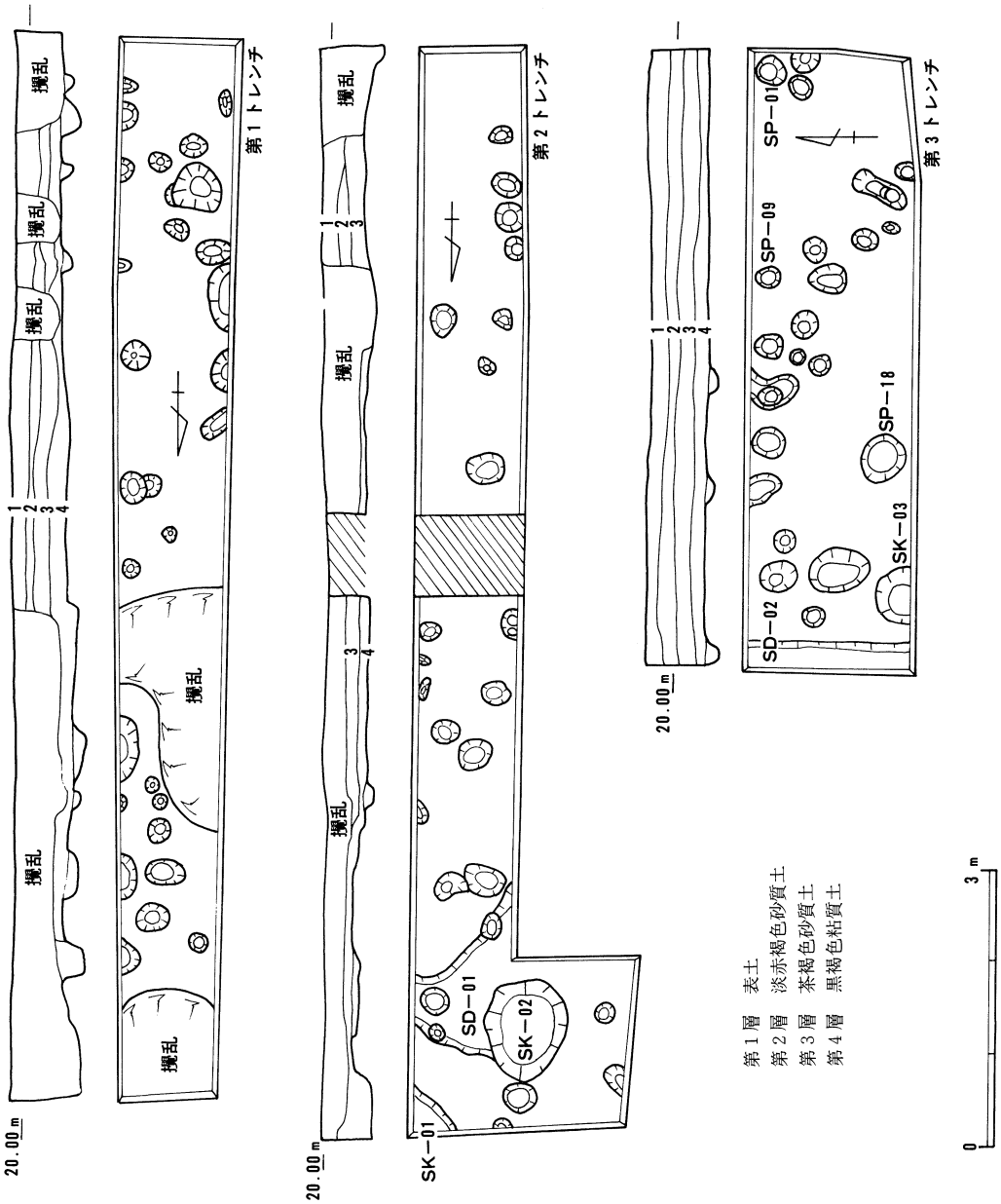
１各トレンチの概要

第１トレンチ　範囲の西側に長さ11.5ｍ、幅1.5ｍのトレンチを南北に設定した。土層は基本的に４層に大別される。第１層は表土

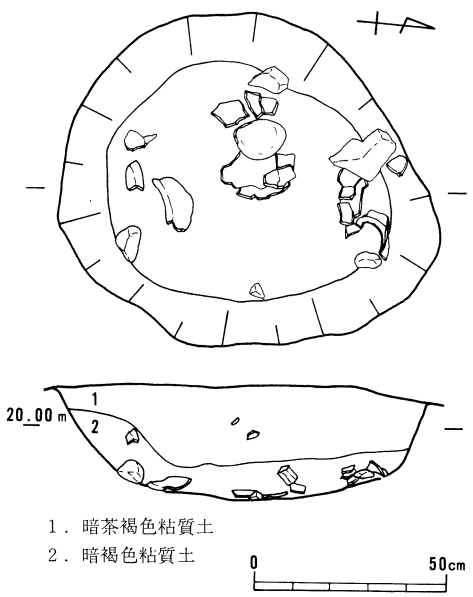


第８図　第６次調査地点トレンチ配置図

層であるが、幾度かの建替えが行なわれ、整地されており、各時期の遺物を含む攪乱層である。また中央から北側に攪乱坑があり、遺構面も破壊されている。第２層も焼土を含む整地層である。第３層は各時期の遺物を含む砂質土であるが、特に中・近世の遺物を多く含んでいる。第４層は黒褐色の粘質土で、弥生土器、土師器、須恵器を含む包含層である。この上面で、若干の溝状遺構が存在する。第５層は、黄褐色を呈し、礫混りの部分と粘土からなる地山である。この上面でピットを検出したが時期の判別は定かにしがたい。またトレンチ幅が狭いため、建物の配置も不明である。



第９図　第１・２・３トレンチ平面図・断面図



第10図　ＳＫ－02平面図・断面図

第２トレンチ　層序は基本的に第１トレンチと同様である。第１層の攪乱層は全体的に深く、第２層が残存している部分は南側の一部分だけである。第４層の弥生土器、土師器、須恵器を含む包含層もこの部分しか残存していなく、第３層下、地山となっている。したがって古墳時代後期以降、遺構面もかなり削平されている。第５層上面（他山）より、ピット、土坑、溝状遺構を検出した。ピットの中には、明らかに弥生時代のものもあるが、多くは古墳時代のものと推定される。

北側で溝状遺構と土坑を検出した。土坑は長径約１ｍ、短径約0.9ｍで部分的にくずれた円形を呈している。底面までの深さ約0.3ｍで底面に土器が多くみられる。埋土は炭を多く含み、上下２層に分層される。土器は布留式土器の新しいものと若干の製塩土器が出土している。

溝状遺構は土坑に切られ、不定形で深さもなく、土坑の西側付近で自然消滅する。時期は弥生時代中期と推定される。

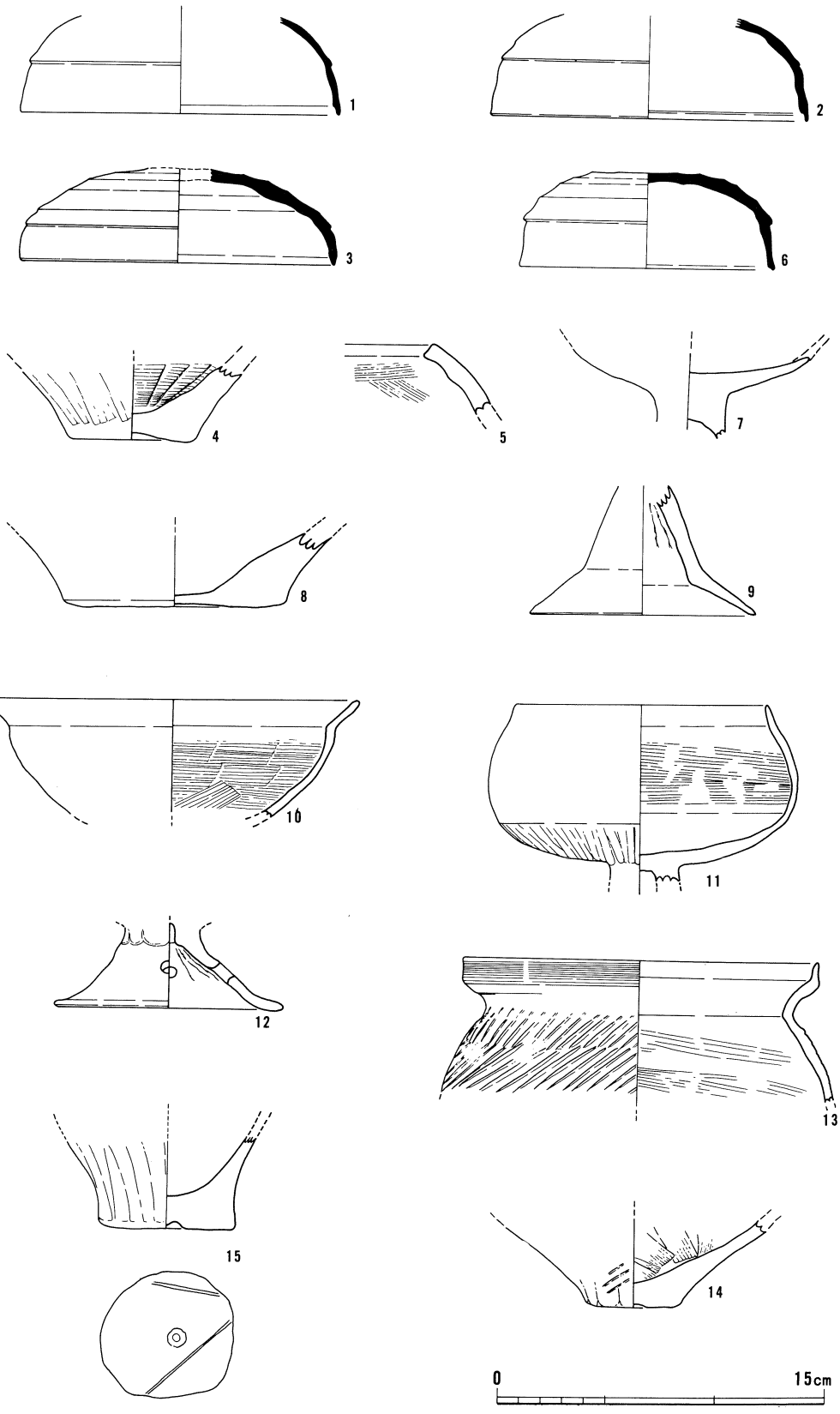
第３トレンチ　第１トレンチと第２トレンチの間、ほぼ中央に長さ７ｍ、幅２ｍのトレンチを東西に設定した。層序は第１トレンチとほぼ同様である。検出した遺構は第４層上面からの溝、第５層上面（地山）からのピットである。ピットの中には弥生時代後期の土器を伴っているものもあるが、多くは古墳時代のものと推定される。

2 出土遺物

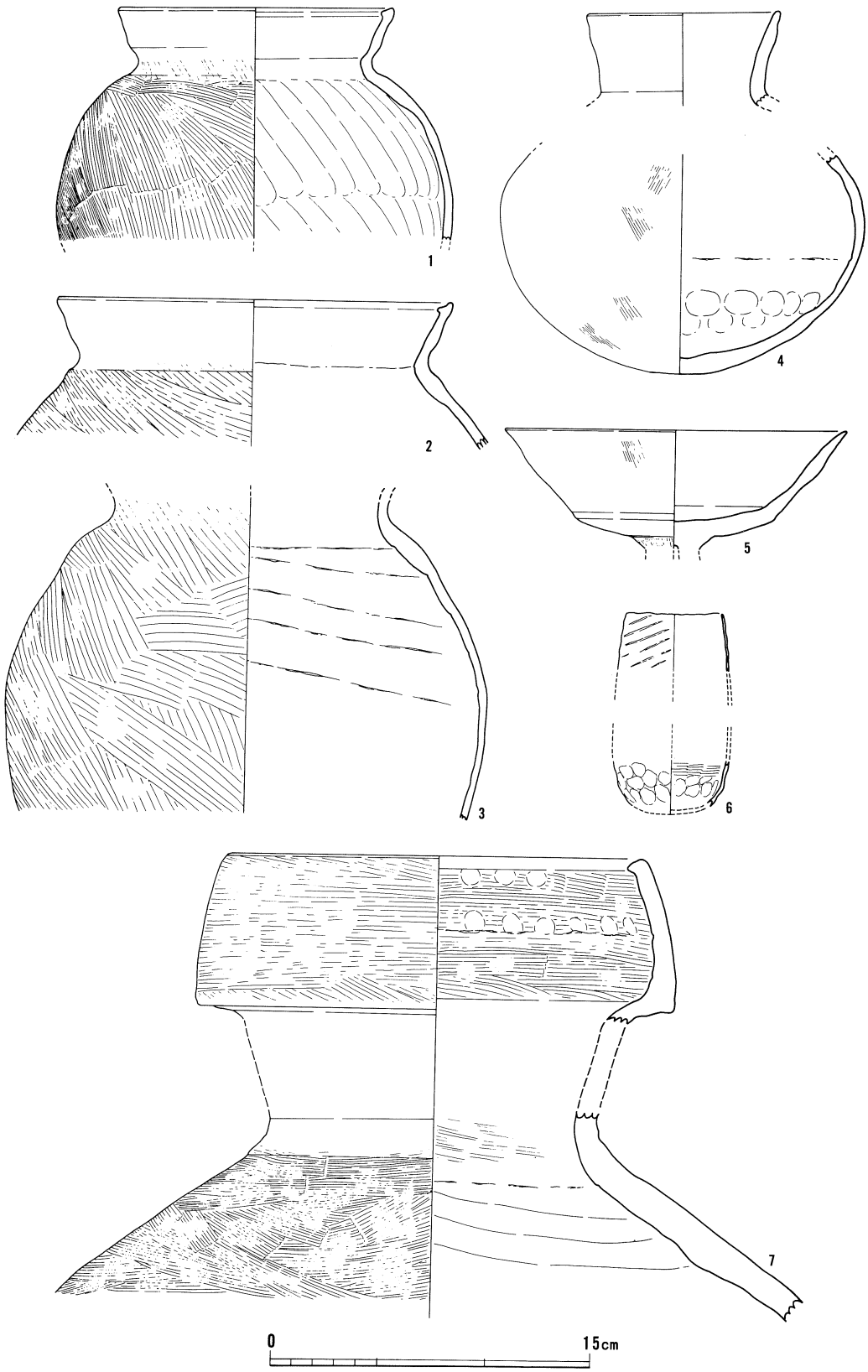
遺物は、溝、土坑、ピット及び包含層から出土している。種別は弥生土器、土師器、須恵器、漢式系土器、製塩土器、石器である。以下、土器と石器に分け報告する。

土器

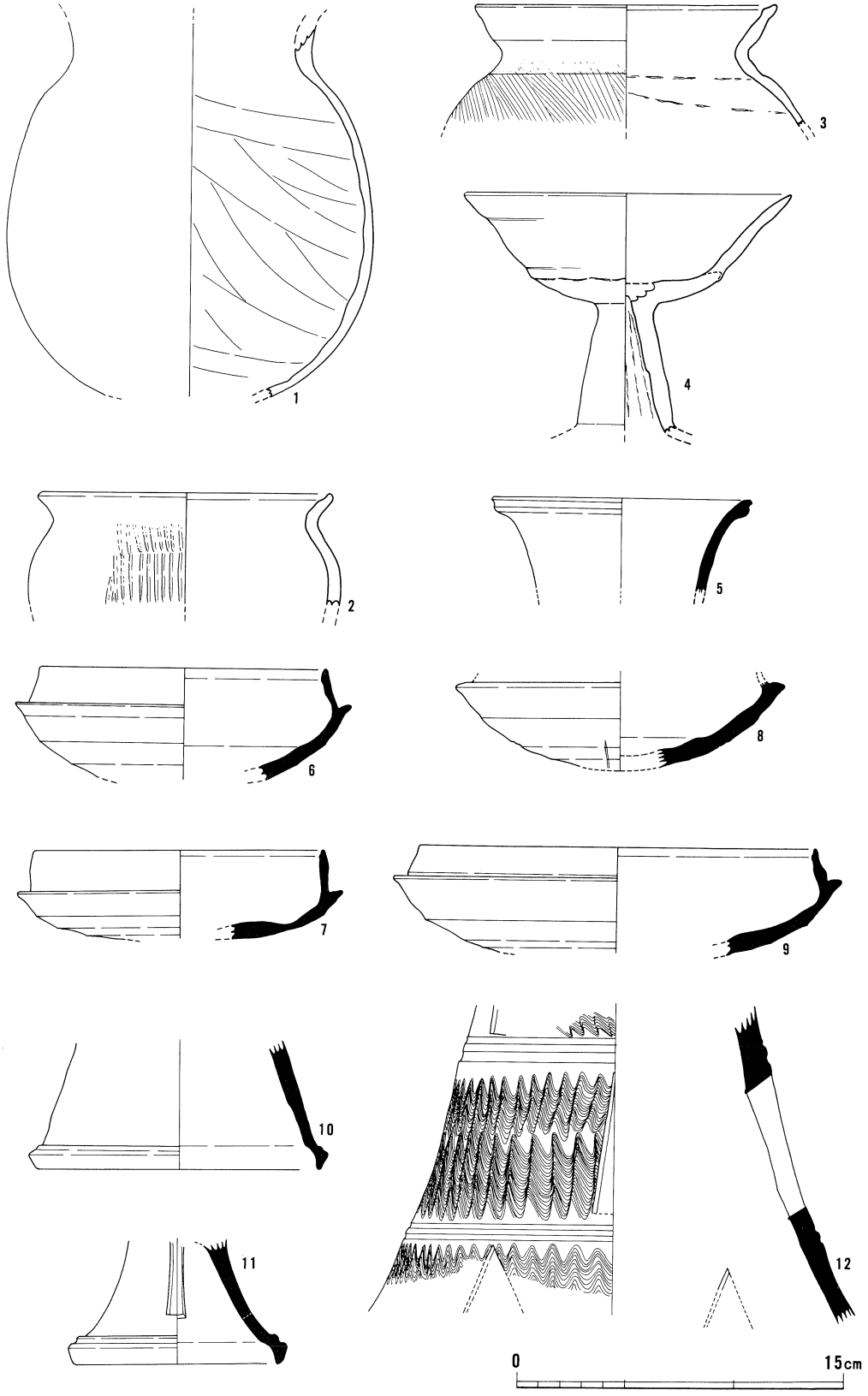
ＳＰ－18　（第11図10～14）弥生時代後期の土器で占められる。鉢10は底部を欠損するが、平底になるものと思われる。外面はナデ、内面は横方向のハケによって調整されている。台付鉢11は台部を欠損する。外面は縦方向のヘラ磨き、内面は横方向のハケで調整されている。12は高杯の脚部で、四方に円形の穿孔がある。内外面ともナデ調整であり、内面に絞り痕が認められる。甕13は外反する口縁部が角度を変えて立ち上がり、受口状を呈するものである。外面は右上がりのタタキが施され、内面は横方向のハケで調整されている。14は底部であるが、器種は明言し難い。外面は右上がりのタタキの後、ナデによって調整されており、内面は左上がりのハケが施されている。



第11図　第 6 次調査地点　出土遺物実測図



第12図　第６次調査地点　出土遺物実測図



第13図　第 6 次調査地点　出土遺物実測図

ＳＤ－１　（第11図８、９）　弥生時代後期の高杯脚部が出土している。両者とも磨滅のため、内外面の調整は不明であるが、９の内面には僅かに絞り痕が認められる。

ＳＫ－２　（第12図、第13図１）　布留式新相を呈する土器群で占められる。甕は、口縁部が頸部から屈曲して緩やかに外反するもの（第12図１、２）と、頸部から緩やかに外反するもの（第12図３、第13図－１）の２種類がある。前者は何れも口縁部が内傾して肥厚しており、外面は粗いハケ、内面はナデ調整である。後者は２個体とも口縁部を欠損しており、端部の様相は不明である。３も外面は粗いハケで内面はナデであるが、　第12図１　は内外面ともナデで、非常に粗雑な作りである。４は直口壺である。外面は縦方向のハケメ、内面はナデで調整されている。５は、上外方へ直線的に伸びる口縁部を有する高杯の杯部である。外面は縦方向のハケメであるが、内面は磨滅のため調整不明である。６の製塩土器は器壁が２㎜と非常に薄く、外面は火熱を受け、淡灰白色を呈する。外面にはタタキが施され、内面はナデ及び板ナデで調整されている。７は西部瀬戸内系の複合口縁壺で、胎土には金雲母が含まれている。外面は口縁部及び体部とも横方向のハケメ、内面は口縁部がハケメで体部はハケとナデで調整されている。

その他の遺構（第11図１～5・15）

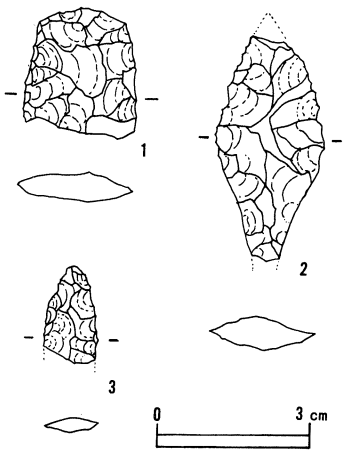
ＳＰ－１（１、２）、ＳＰ－９（３）では須恵器の杯蓋と土師器の高杯が出土している。また、ＳＫ－７では弥生時代中期の生駒西麓産と思われる無頸壺と後期の底部、ＳＰ－11では弥生時代中期の底部が出土している。

包含層の土器　（第13図２～12）

包含層からは弥生土器、土師器、須恵器、漢式土器が出土している。２の漢式土器は底部を欠損しているが、恐らく平底の深鉢になるものと思われる。外面には縦方向のタタキが施され、内面は回転のナデ調整である。

石器　（第14図１～３）

ＳＰ－18（１）、ＳＤ－01（２）、包含層（３）より出土しており、素材は何れもサヌカイトである。１は両面を押圧剥離によって調整されたもので、端部は丸く終っている。２は柳葉形式の石鏃で、両端は欠損している。縁辺には押圧剥離による細かい調整が行なわれている。３も石鏃で、先端のみ残存している。縁辺には押圧剥離による細かい調整が行なわれている。



第14図　石器実測図

第７次調査地点

第７次調査地点は豊中市末広町１丁目109番地にあたる。当地点は台地の中央部、標高約23ｍに位置する。範囲内にトレンチをＬ字型に設定して行なった。

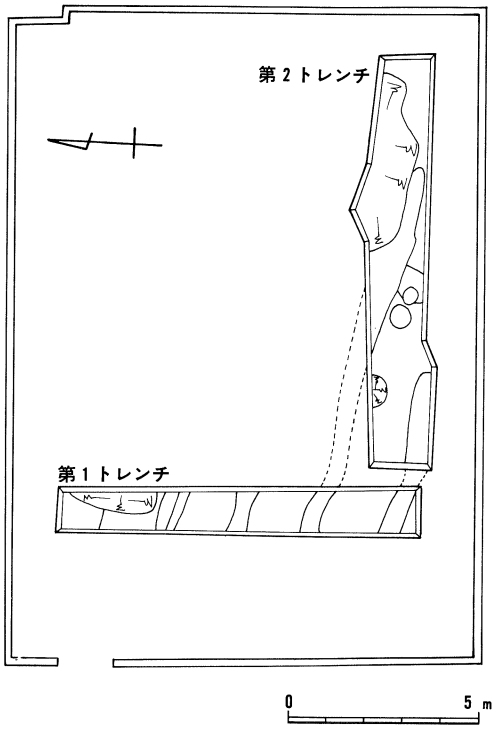
1 各トレンチの概要

第１トレンチ　敷地の西側に長さ9.5ｍ、幅1.3ｍのトレンチを南北に設定した。土層は基本的に４層に大別される。各層より各時代の遺物が出土している。地山面まで表土下約0.7ｍである。

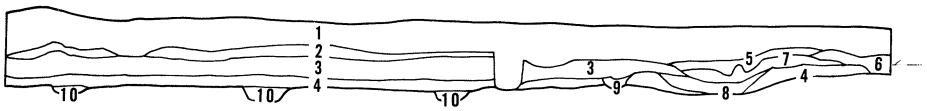
遺構は、北西方向から南東方向に走る溝を５条検出した。ＳＤ－01は第３層上面で検出したもので、幅約1.5ｍ、深さ0.3ｍである。須恵器片がわずか出土しているが、層位より近世以降の時期と推定される。ＳＤ－02は第４層上面で検出したもので、幅0.3ｍ、深さ0.2ｍである。遺物は土師質土器、須恵器、磁器が出土している。近世の時期であろう。

ＳＤ－03、ＳＤ－04、ＳＤ－05は第５層（地山）上面で検出されたもので、幅約0.5ｍ前後、深さ0.2ｍ弱である。ＳＤ－05より瓦質土器が出土した。中世の時期と推定される。

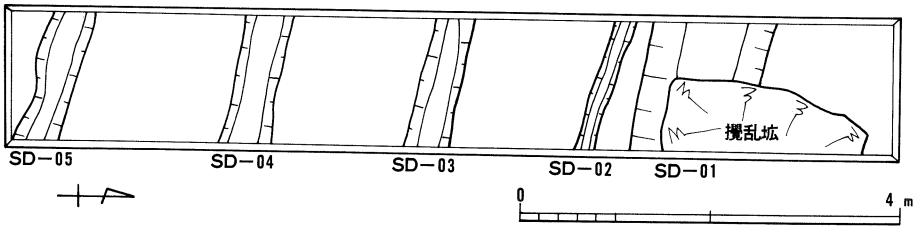
第２トレンチ　敷地の南側に長さ10ｍ、幅２ｍのトレンチを東西に設定した。層序は第１トレンチと同様であり、第１トレンチのＳＤ



第15図　第７次調査地点トレンチ配置図



1．攪乱層　3．灰色砂質土層　5．暗褐色砂質土層　7．暗黄灰色砂質土層　9．淡灰色砂質土層
2．黒色土層　4．明黄灰色粘質土層　6．灰黄茶色砂質土層　暗灰色砂質土層　10．暗黄灰色粘質土層



第16図　第１トレンチ平面図・断面図

−04と連続すると思われる溝を検出したのである。この溝も東側で自然消滅する。

出土遺物は細片で図化しえるものは１点もない。

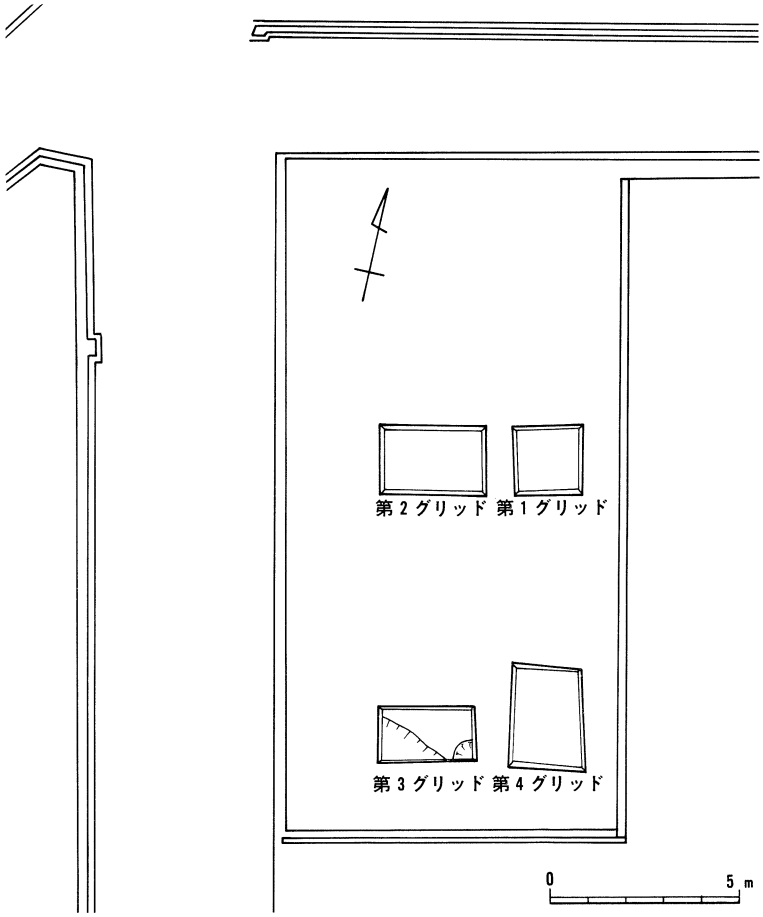
第８次調査地点

第８次調査地点は豊中市末広町１丁目107番地にあたり、第７次調査地点の北方約20ｍである。住宅建築工事の関係から時間がそれほどとられず、また遺構面が建物の基礎より深いため、基礎をさけてトレンチ調査を実施した。グリッドは２ｍ×３ｍ内外のものを４個所設定した。

１ 各トレンチの概要

各グリッドの層序は基本的に同じであり、４層に大別される。北側の第１トレンチ、第２トレンチでは包含層が全体的に薄く、また削除されている部分もある。南側の第３トレンチ、第４トレンチでは、地形が若干南に傾斜しているため、包含層が10cm～15cmの厚さで残存している。第１層は表土で盛り土されている。第２層は旧表土で陶磁器、須恵器、土師器を含んでいる。第３層は床土で瓦器、須恵器、土師器片を含む。第４層は南側の第３トレンチ、第４トレンチでは上下に分層されるが、出土遺物に差はなく、瓦器、須恵器、土師器などが包含されている。上層が薄く、下層が濃い暗茶褐色粘質土である。

検出した遺構は第５層（地山）上面において、第１トレンチで耕作状の小溝と第３グリッドの溝状遺構である。溝状遺構は北西方向から南東方向に走るもので、北側半分のみを検出した。南側は未調査地にのびるためはっきりしないが、検出した状況から溝になるものと考えられる。溝幅２

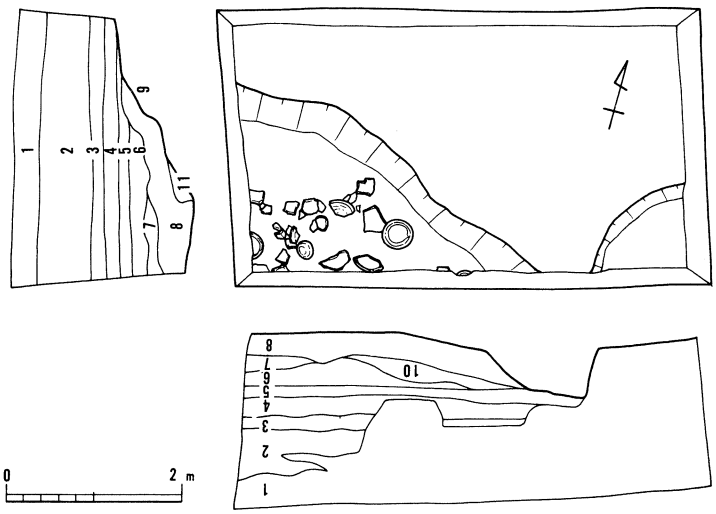


第17図　第８次調査地点トレンチ配置図

m以上、深さ0.5mで第19図の須恵器、土師器が底面上で出土している

2 出土遺物

遺物は概ね包含層、及び第3トレンチ溝状遺構内から出土している。包含層中のものは細片であり、図示し得るものはほとんどない。したがって報告は、溝状遺構内から出土したものに限る。出土状態も埋土最下層の底面上で纏まっている。



1．表土　2．灰褐色砂質土(旧耕土)　3．暗黄灰色砂質粘土(床土)
4．暗茶灰色粘質土　5．暗茶色粘質土　6．淡茶灰色粘質土
7．淡黄茶色粘質土　8．灰色粘質土　9．暗黄褐色粘質土
10．淡茶灰色粘質土　11．灰色砂質粘土

第18図　第3トレンチ平面図・断面図

須恵器（第19図）

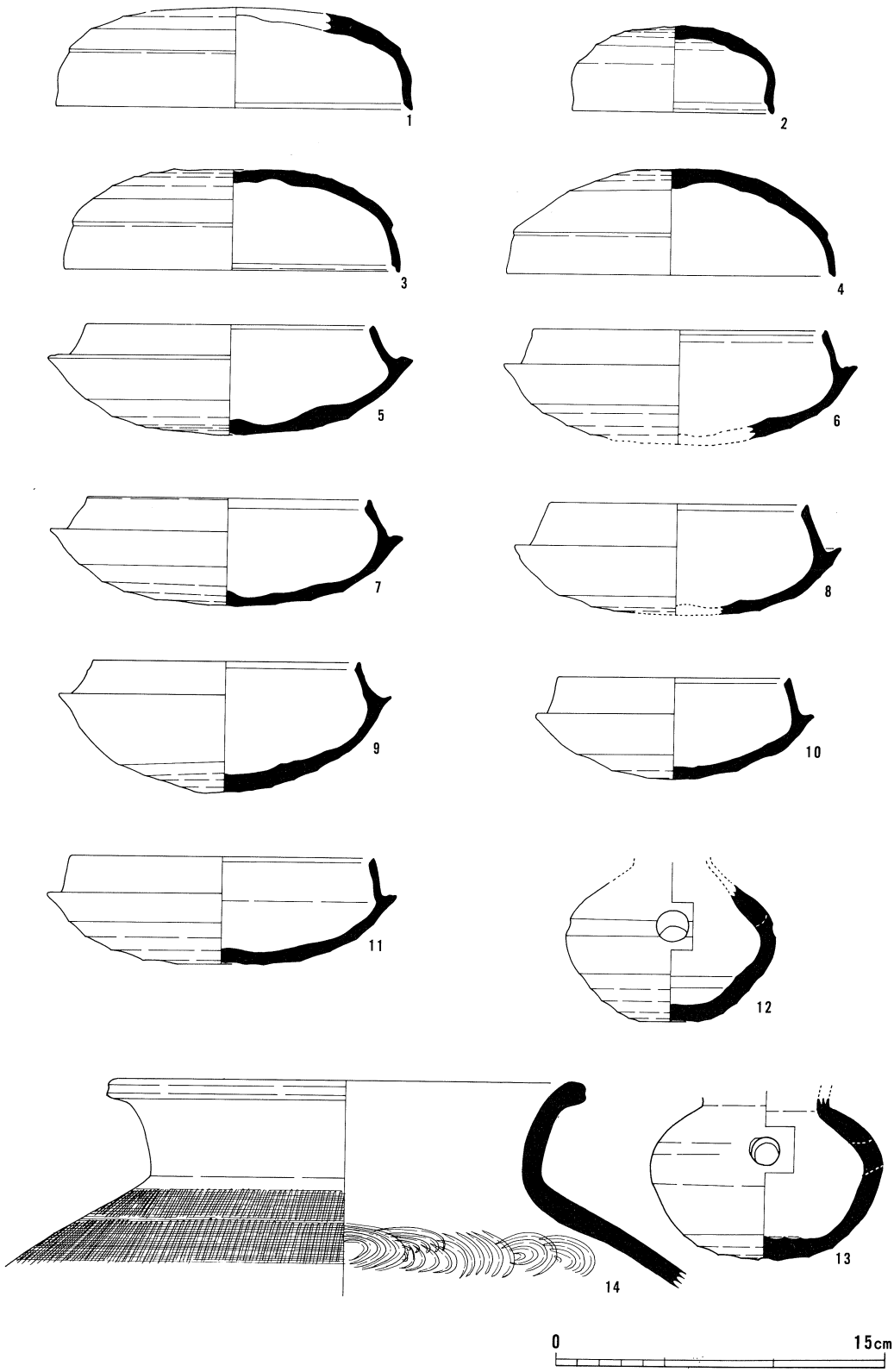
蓋杯（1・3～11）　杯蓋（1・3・4）は口径が16cm程度の大型である。口縁端部は段を有しているが丸味を帯びる。また凹面をなすものもある。天井部と口縁部を界する稜線は丸味を帯び、鈍く、突出度も弱い。口縁部は緩く内傾するものと端部で緩やかに外反するものがある。天井部は扁平気味のものと、若干高く丸味をもつものがある。天井部の⅔～½程度が回転ヘラ削りされている。3は焼成が悪く、生焼けである。

杯身（5～11）は、口径が15～16cmのものと13cm弱のもの（10）1点がある。口縁部立ち上がりの内傾度が強いものがある。端部は段を有し、凹面をなすが、全体的に丸味を帯びている。受部は外上方に簿く突出するものと器壁が厚く、丸味を帯びるものがある。底部は扁平気味なものと丸味を有するものがある。全体の½～⅔程度が回転ヘラ削りされている。7と11は生焼けで、5は焼け歪んでいる。

蓋（2）　口径9cm強で、下方にのびる口縁は端部で緩く外反する。端部は内傾する段を有するが丸味を帯びている。天井部はやや高く、回転ヘラ削りが全体の½程度行なわれている。

瑞（12・13）　体部のみ残存する。12は最大径9.7cm。体部はやや扁平気味で、体部の中央からやや上に、上外方から内方へ斜めに穿孔されている。この位置に一条の浅い太めの凹線を施す。胴部下半まで回転ヘラ削り。13は最大径10.6cm、球形な体部で、中央からやや上に穿孔を有する。底部付近回転ヘラ削り。

甕（14）　口径21.8cm、緩く外反する頸部から口縁端部で若干肥厚し、水平気味に開く。端



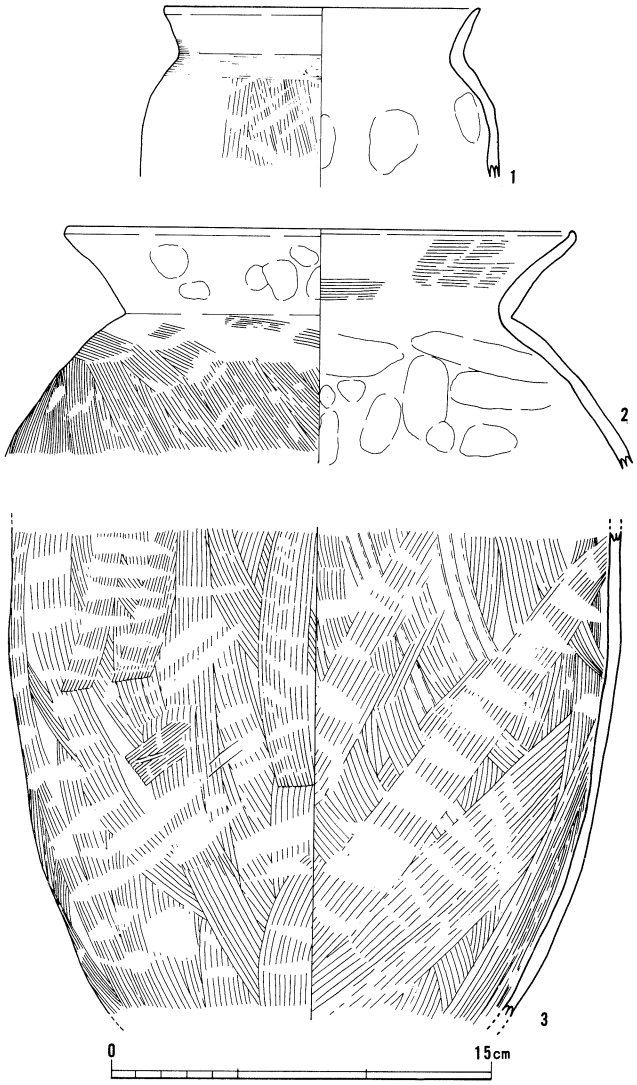
第19図　第 8 次調査地点　出土遺物実測図

部外面に凹線を施す。肩部外面は平行タタキ、その上をカキ目調整、内面は青海波文を残す。

土師器（第20図）

甕（１～３）　１は小形の甕である。口縁部が緩く外反し、端部は簿く尖って終る。外面はタテ方向のハケ調整、内面はナデ調整で指頭圧痕を残す。胴部下半を欠損する。２は大形甕である。口縁部がきつく外反し、端部は突出気味に内傾し、丸く終る。外面はタテ方向のハケ調整、内面はタテ方向のナデ調整で指頭圧痕を残す。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。３は長胴甕の胴部である。内外面ともタテ方向の粗いハケ調整である。

これらの遺物は、溝から出土したものの出土状態から一括性の高いものである。須恵器は桜井谷窯跡群編年試案のII型式１段階～２段階のものである。個々においては若干の型式差がみられるものの、集落遺跡における出土状態の一端を示す資料であろう。また、この時期の土師器の様相が不鮮明な中で、器種が限定されたものの、共伴の資料が得られたことは成果である。



第20図　第８次調査地点　出土遺物実測図

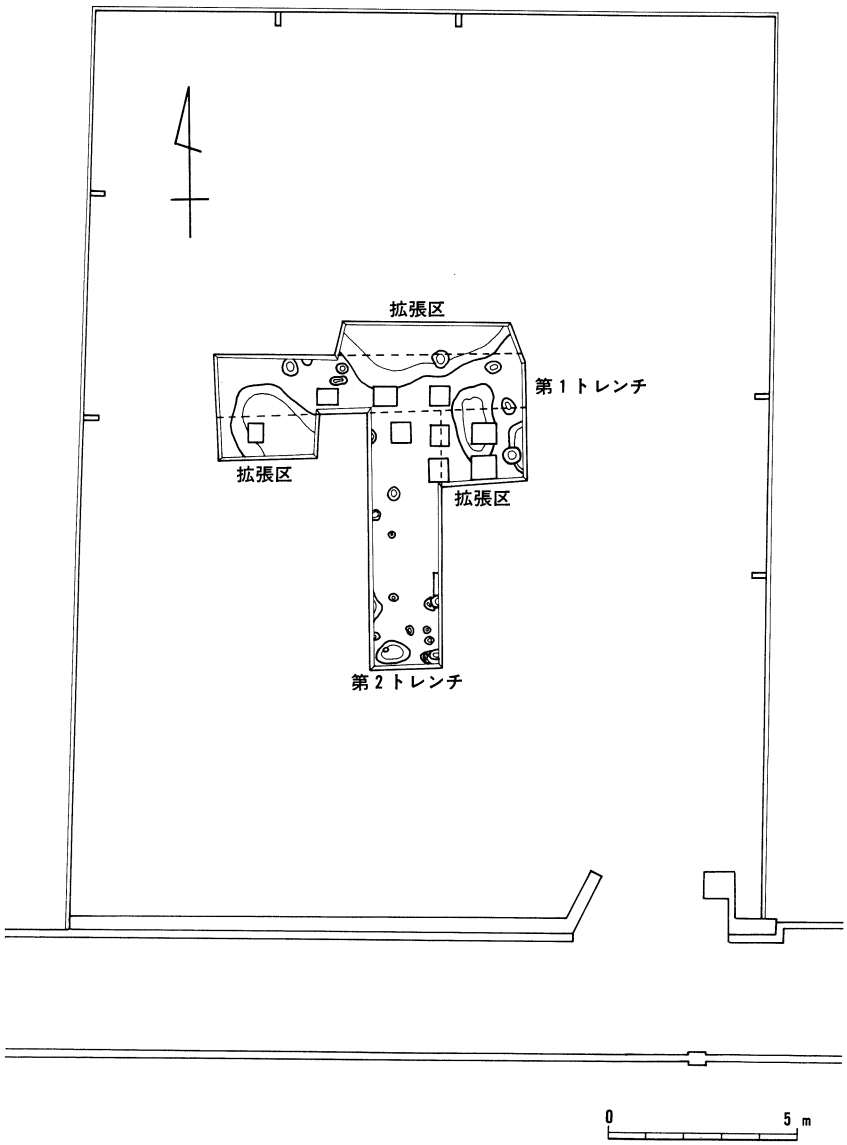
第９次調査地点

第９次調査地点は、豊中市玉井町２丁目181番地にあたる。

調査は敷地中央部の東西に、長さ８ｍ、幅2.5ｍの第１トレンチを、南北に長さ７ｍ、幅２ｍの第２トレンチを、第１トレンチの南側にＴ字形に設定し、実施した。なお、遺構の広がる所は若干の拡張を行なった。

１　各トレンチの概要

本調査地の基本層序は、第１・２トレンチとも、第１層攪乱、第２層（淡茶灰色砂質土）、第３層包含層（暗茶褐色粘質土）、第４層地山（暗茶黄色粘質土）に大別される。第３層は、古墳時代の遺物包含層であるが、殆んど削平を受けており、ところどころに堆積を残すのみである。第４層（地山）は、第２トレンチの南側で茶褐色礫層に変わっている。



第21図　第９次調査地点　トレンチ配置図

第１トレンチ

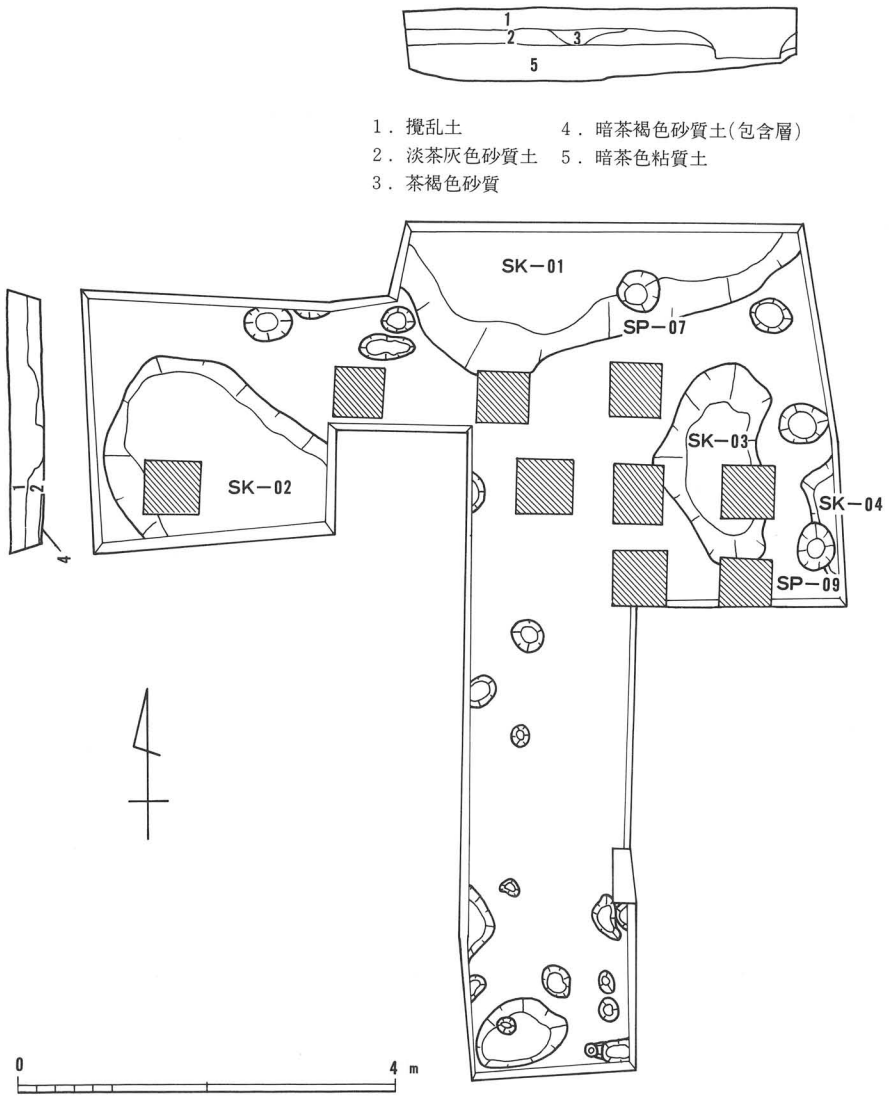
検出した遺構は２層上面で幅75cm、深さ15cmの南北に並走する３条の近世溝と、４層上面（地山面）のピット、土坑である。ピットは円形で径30cm～40cm、深さ10cm～40cm程度のもので、ＳＰ－７と９は土坑の埋没後に作られており、各ピットからは須恵器、土師器が出土している。

土坑は４基検出された。ＳＫ－１はかなり大きく、なだらかな傾斜で北側に延びており、須恵器、土師器が出土した。ＳＫ－２は南東方向に延びるようであり、深さは80cmを測る。出土遺物は数片の須恵器と弥生土器・甕の他は、土師器の高杯や甕が大半を占めている。ＳＫ－３・４も少量ではあるが須恵器・土師器が出土している。

これらの土坑は、調査区外へ延びるため規模・性格等を摑むまでには至らなかった。

第２トレンチ　検出した遺構は４層上面（地山面）でのピットだけである。トレンチ北側のピットは、径15cm～30cmで円形をなし、深さは10cm～18cm程度のもので、暗茶色粘質土の埋土より須恵器、土師器の遺物が出土している。南側の茶褐色礫層より切りこまれたピットは、総じて不定形で５cm～10cmと浅く、遺物は出土していないが、埋土の色調が北側のピットと同じであり、時期差はないものと推測される。

今回の調査は面積が狭いことにより遺構の広がりや、遺跡の性格を把握することができなかった。しかし古墳時代後期の須恵器や土師器の出土と、ピット・土坑の検出により、古墳時代後期の集落であったことが窺える。



第22図　第９次調査地点平面図・断面図

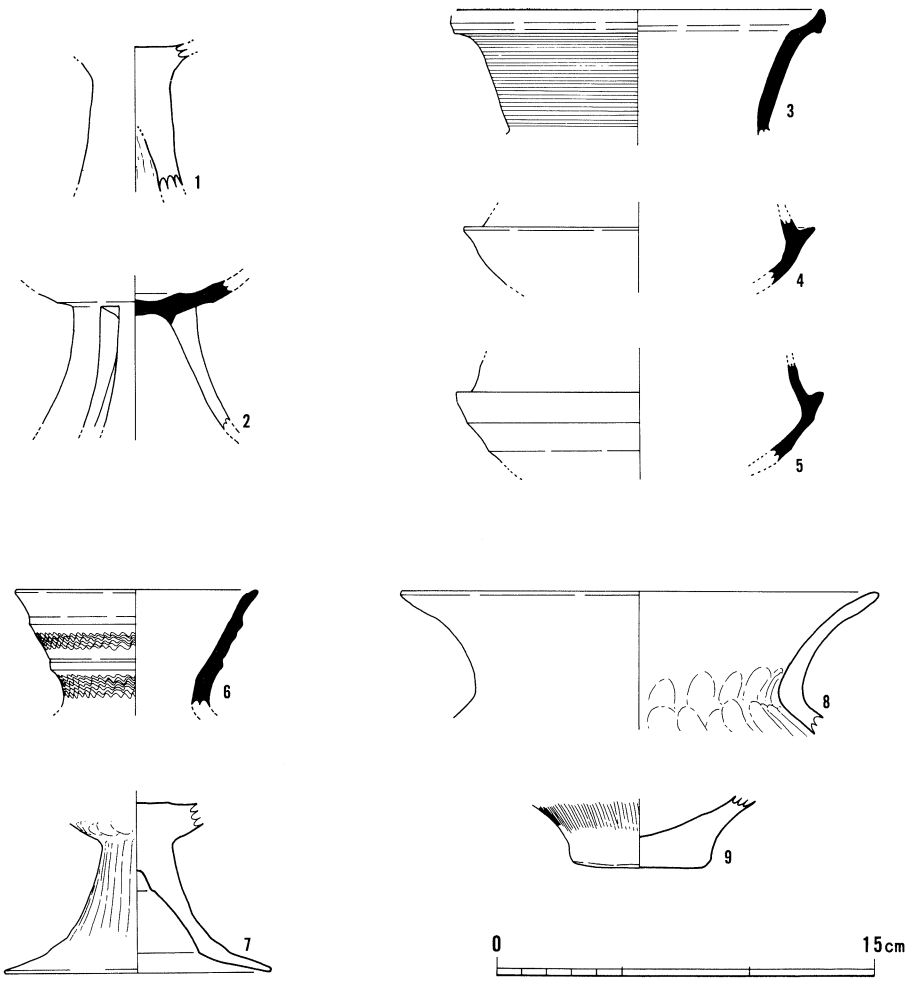
2 出土遺物

遺物はピット、土坑、及び第２、３層（包含層）から須恵器、土師器、弥生土器、石鏃が出土している。以下、土器と石器に分け、報告する。

土器（第23図）

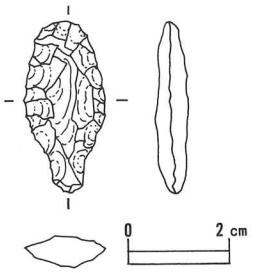
第23図に示した土器類は第１トレンチのＳＫ－01とＳＫ－02から出土した須恵器、土師器、弥生土器である。

ＳＫ－01（１～５）　１は土師器の高杯脚部であるが、磨滅が激しいため、脚部内面のしぼり痕が残る他は不明である。２は須恵器の高杯で、脚部の内外面と杯部の内面はヨコナデ調整、外面はヘラ削りを行ない、三方に長方形のスカシ窓を有する。３は須恵器の壺形土器の口縁で、内面から口縁端部外面にかけてはヨコナデ調整、外面はカキ目調整を行なっている。４は杯身で、受部はやや上方にのび、立ち上がりは内傾する。ヨコナデ調整が内面に認められるが、外



第23図　第９次調査地点出土遺物実測図

面は磨滅が激しく不明である。５も杯身で受部は太く端部は丸く終わり、立ち上がりは外反気味に内傾する。受部には接合痕が認められる。内外面ともヨコナデ調整後、外面はヘラ削りを行なっている。



第24図　石器実測図

ＳＫ－02（６～９）　６は須恵器の直口壺で、頸部から口縁部はほぼ直線的に外傾し、頸部には突帯と波状文が交互に二帯ずつ巡る。内外面ともヨコナデ調整を行なっている。７は土師器の高杯脚部で、脚柱部と裾部の境は不明瞭である。脚柱部から裾部へゆるやかに移行し端部は丸く終わる。脚柱部の内面はヘラ削り、外面はヘラ磨き、裾部外面はナデ調整を行なう。８は土師器の壺の口縁部で、口縁はやや外反気味に外傾する。内外面ともヨコナデ調整、頸部内面はユビナデを行なう。９は弥生土器の甕底部で、内面は磨滅が激しく不明であるが、外面はハケ調整を行なう。

石器（第24図）

第24図の石鏃は第１トレンチの第３層より出土した弥生時代の凸基有茎式のものである。先端部は欠損しており、基部は錐として用いたためか磨耗している。

第25図　第９次調査地点第２トレンチ遺構検出状況

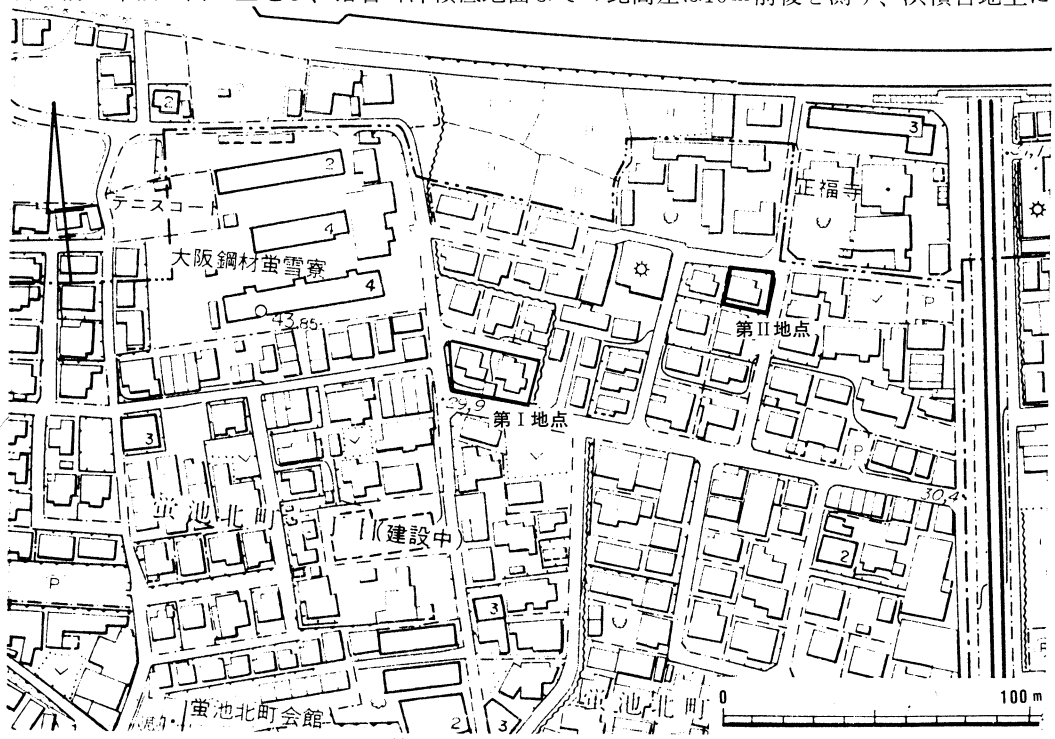
蛍池北遺跡第２次調査地点

Ⅰ．調査の経緯と地理的環境

調査地は豊中市蛍池北町一丁目155-1番地に所在する。蛍池北遺跡II地点(宮ノ前遺跡)を含めた付近一帯の洪積台地は、昭和43年に中国自動車道路建設工事に伴って確認された周知の宮ノ前遺跡が位置し、蛍池北遺跡もその範囲に含まれる地域である。蛍池北遺跡第２次調査地点の南西150ｍ付近には、昭和54年度に豊中市教育委員会による発掘調査を実施した第１次調査地点が位置し、今回の調査地と近接する場所である。

今回、第２次調査地点に新規木造住宅建設工事の申請書が提出された。後日、豊中市教育委員会では、遺跡の遺存状況を把握する目的で工事主体者との協議の結果、住宅建設敷地内の80㎡が調査対象面積となった。発掘調査は、昭和58年12月２日～12月13日まで実施した。

地理的な環境についてみると、池田市の境界に接し、本遺跡の立地する豊中北部地域は千里山丘陵が南西方向に派生する桜井谷、刀根山河岸段丘崖線が発達し、猪名川水系の千里川右岸流域にかけて形成している地形である。本遺跡も古猪名川によって形成された標高30ｍの池田宮ノ前河岸段丘面に立地し、猪名川沖積低地面までの比高差は10ｍ前後を測り、洪積台地上に



第26図　調査地点位置図

位置している。

II. 調 査 の 概 要

調査方法は、調査面積80㎡に磁北方位で４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。北東ポイントを基準点とし、東西ラインをアラビア数字で、南北ラインはアルファベットで表示した。

層序

層序構成は、第１～３層までに区分できる。層序堆積は良好ではなく２次的な堆積状況を示していた。第１層（10cm）は表土層、第２層（遺物包含層15cm）は弥生時代中期～鎌倉時代にかけての遺物を混在するが希薄な層序である。第３層（黄褐色砂礫粘土）は、地山層であり、以上のような堆積状況を示していた。

遺構

調査区域において、遺構の残存状態は良好ではなく、現・近代による水平攪乱が生じていた。検出遺構面の層位関係については認められず、第３層の地山層上面を切り込んだ13～14世紀段階に比定される溝状遺構、ピット、所属時期不明の掘立柱建物跡など重複する遺構を検出した。

落ち込み状遺構

掘立柱建物跡の下層面より、不規則な自然の落ち込み面を検出した。深さ25cmを測る。埋土内の遺物は、弥生中期（第Ⅲ様式）の範疇に属する高杯１個体分が出土した。

掘立柱建物跡

２～３－Ｂ～Ｃ地区において、掘立柱建物跡の柱穴列を検出した。掘り方上面より、切り合い関係が認められた。柱穴の一辺75cm、深さ20cm前後を測る。柱穴列の対応関係にある柱穴は現存せず建物跡の配置、規模については不明瞭であった。柱穴内の埋土遺物は、微量の土師器、須恵器を含む。

溝状遺構

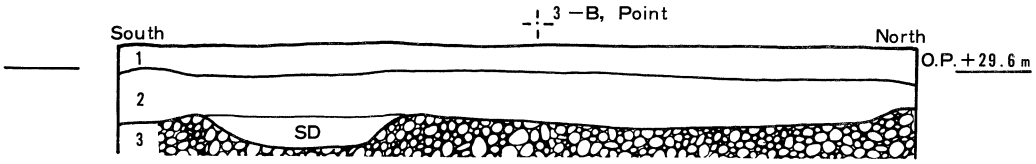
２～３－Ｂ～Ｃ地区において、東西に走行する一条の溝状遺構を検出した。溝は掘立柱建物跡の柱穴を切断している。溝幅35cm、深さ10cm前後を測り、溝内の出土遺物は、13世紀に比定される瓦器、土師器類も微量に含んでいた。

出 土 遺 物

出土遺物は、殆んどが包含層から出土したもので、遺構に伴うものはあまり多くない。その中で型式的に時期が辿れる遺物だけを抽出し、報告する。

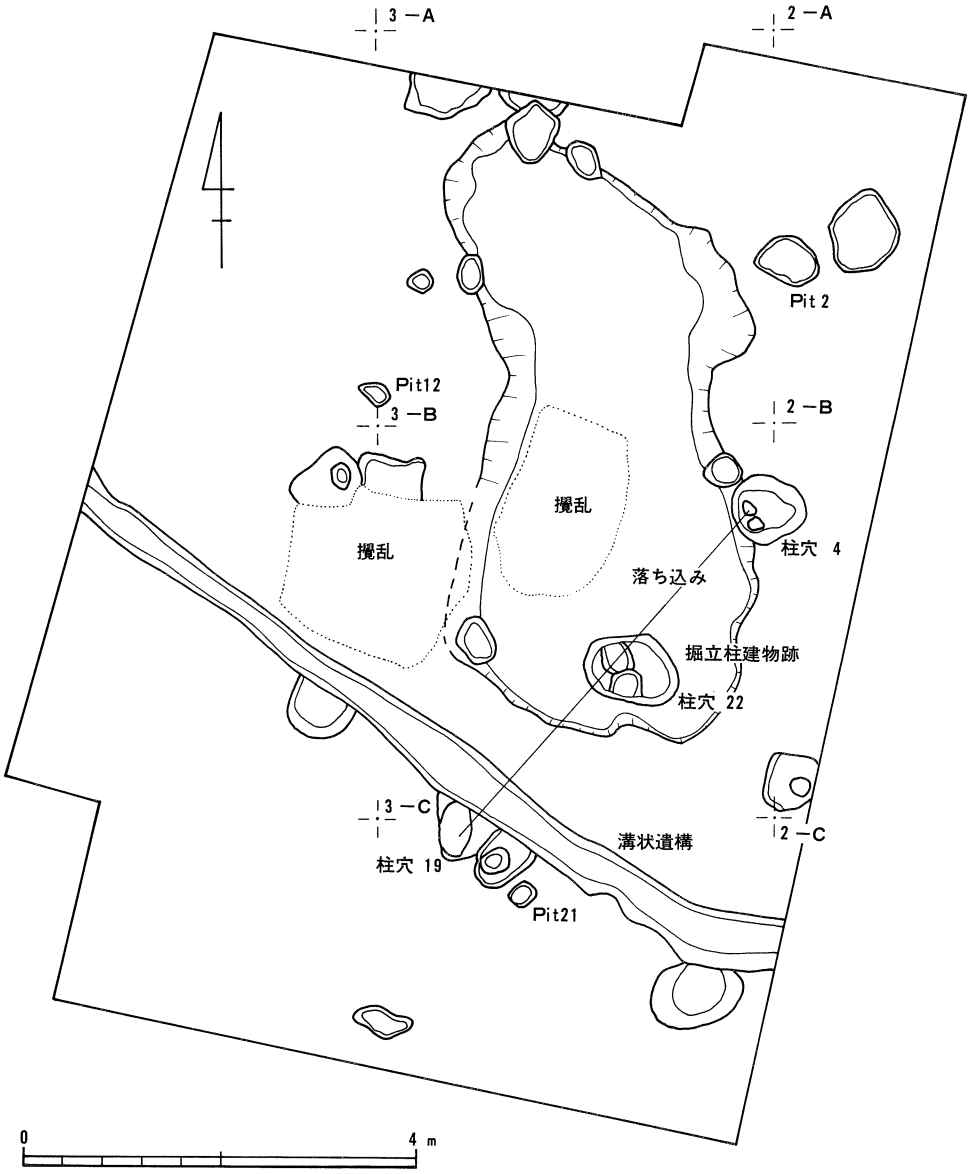
石器（第29図22）

石器類は、第２トレンチの遺物包含層より出土した太型蛤刃石斧１点のみで、後世の遺物と共伴しての出土状況を示す。



第１層　表土　第２層　茶褐色砂質土　第３層　地山

第27図　層序断面実測図



第28図　第２次調査地点平面図

基端を欠失し、約３分の１が残存している。残存長6.8cm、最大幅5.6cm、最厚部3.0cmを測る。Ａ・Ｂ両面に二次的な敲打による剝離痕が残り、特にＢ面は大型の剝離面を示す。基部から刃部にかけての研磨痕の方向性および使用痕（擦痕）の方向性も不明瞭である。刃部は刃潰れを起こしている。石質は緑色片岩。弥生時代中期の所産と思われる。

須恵器（第29図１、２）

後世の遺物と混在し、包含層より出土したものである。資料の殆んどが細片で、遺存状況も悪く、層位・共伴遺物などから時代区分を追える様な出土状況ではない。したがってここでは、型式的に時期がおさえられる杯身を示す。

１．底部端に八の字状に外方にひらく貼付高台が内寄りにつけられ、端部はわずかに段をなし、内端部が接地するタイプである。高台周辺に自然釉が付着し、内底面に回転ナデ調整を加えている。復元高台径5.2cmを測る。陶邑の型式編年(註１)によると、Ⅲ型式第２段階に相当する。

２．底部端にほぼ直立する形で貼付高台がつけられている。底部には回転ヘラ削り調整、他の各部については回転ナデ調整を施している。Ⅳ型式第１段階に相当する。

中世の遺物（第29図３～21）

調査区において、遺物包含層、遺構内より12Ｃ中葉～16Ｃにかけての中世遺物が出土している。ここでは、今回の報告分の中で唯一まとまった遺物の、時間的な流れを辿る事ができる。

東播系捏鉢

出土したいずれもが、体部から口縁部にかけての遺存状況である。口縁部の形状により２型式の鉢に分類できる。

捏鉢Ａ（７・８・９）

口縁部を上下につまみ出し、体部内面と口縁部端面は鋭角をなす。砂粒の混入が激しい。ヨコナデ調整される際の凹凸面が著しい。又、外面口縁部下に変色した部分があり、重ね焼き痕が観察できるのもこのタイプである。

捏鉢Ｂ（３・４・５・６）

口縁端部が丸くなり、上下へのつまみ出しも殆んどなくなり、体部外面と端部外面との接点を丸く仕上げる。ヨコナデ調整される際の凹凸面があまりない。

内面の調整手法に関しては２型式とも大差はないが、体部のヨコナデ調整の入念さ、胎土、焼成等に若干の違いがみられる。魚住編年(註２)を準用すれば、Ａ→Ｂへの型式的移行過程が思料される。わずかな時間的差異が見られるものの、13Ｃ中頃～14Ｃの年代を与えても大過ないものと思われる。

（３はＳＰ－12、他は遺物包含層出土）

瓦器椀

15．内面の暗文が退化し、矮小化・粗雑化してゆく終末段階に近いタイプである。口縁部は肥厚し、丸くおさめられている。粗雑化ずる中では、比較的しっかりとしたつくりをしている。

内面から口縁部にかけてヨコナデ調整を施し、外面は未調整である。口径10.2cmを測る。

土釜

10．内傾する口縁部からなり、口縁部のやや下に狭い下向きの鍔をめぐらす。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部外面は不調整である。胎土は良好で、器面は淡黄褐色を呈す。土師器釜。（包含層）

11．内傾する口縁部からなり、肩部に幅の狭いやや上向きの鍔をめぐらす。胴部内面はヘラ削り調整、口縁部内外面から胴部外面にかけてヨコナデ調整を施す。瓦器釜。（ＳＰ－２・掘方埋土）

12．内傾する口縁部の傾きに続けて肩部に幅の狭いやや下向きの鍔をめぐらす。口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。瓦器釜。（包含層）

14．直立する口縁部からなり、口縁部外面に幅の狭い水平方向の鍔をめぐらす。口縁部内外面はヨコナデ調整を施し、胴部外面は不調整におわる。胎土は砂粒を含み、色調は暗灰色を呈す。瓦器釜。（包含層）

土釜の各形態および製作技法、調整・焼成手法の変化に着目すると、類似したタイプの集合体が明らかにできる。畿内における土釜大別(註３)により、13Ｃ～14Ｃにおける摂津・山城の分布様相を明確化する糸口を見出せたと考える。

足釜

13．胴部外面に断面円形の三足を貼りつける形態をもつ。体部内面はハケメ調整を施し、外面は不調整におわる。一部の足部の遺存状況だけでは何とも言えないが、足釜型式編年(註４)から、鍔に接しての足部を直下に貼りつけるタイプが想定できる。又、京都大学教養部構内の遺跡出土(註５)の足釜との調整手法の同一点から、若干の時期差は考えられるものの、13Ｃ代の年代を与えても大過ないものと思われる。

国産陶器

16．備前焼の摺鉢である。体部下半を欠失し、復元口径24cmを測る。10本単位の櫛目を有し、褐灰色に焼成されている。粘土紐を巻き上げ、外面のハケメ調整は粗いヨコナデ・ナデ手法により大部分が消されている。外面口縁部下に色調の変化が明瞭に観察できる。

中国産陶磁器

17．白磁四耳壺である。口径9.6cmを測る。胎土は灰白色できめ細かく、極めて薄く施釉され、釉色は乳濁色を帯びている。口頸部は短く、口線部はくの字状に折り曲げ、端部をそのまま挽き下げ、丸くおさめている。形態分類から、平出紀夫氏の型式編年(註７)・Ⅰ類に相当すると思われる。

18．龍泉窯系の青磁である。縦方向の沈線により体部内面を５分割し、区画内に劃花文様を片切彫りしたものである。胎土は暗灰色できめ細かく、濃緑色の釉が薄く施釉されている。口径16cmを測る。太宰府編年(註８)・分類碗Ⅰ－４・ａ類に属し、使用年代という問題を別にすると、

遅くとも13C末の段階で見られなくなるタイプである。

19・20・21．龍泉窯系の青磁である。共に鎬のない蓮弁文様を片切彫りで表現されている。胎土は密で暗灰色を呈し、濃緑色の釉が薄く施釉されている（21）と、密な灰白色の胎土をもち、淡緑色の釉を薄く施釉されている（19・20）とに分かれる。又、（21）は蓮弁部の盛り上がりを失っているのに対し、（20）にはそれが見られる。太宰府編年・Ⅰ－5・a類に属し、14C中半に比定できる。

その他、細片のため図示できなかったが、製塩土器、美濃・瀬戸系のおろし皿（遺物包含層）等も出土している。

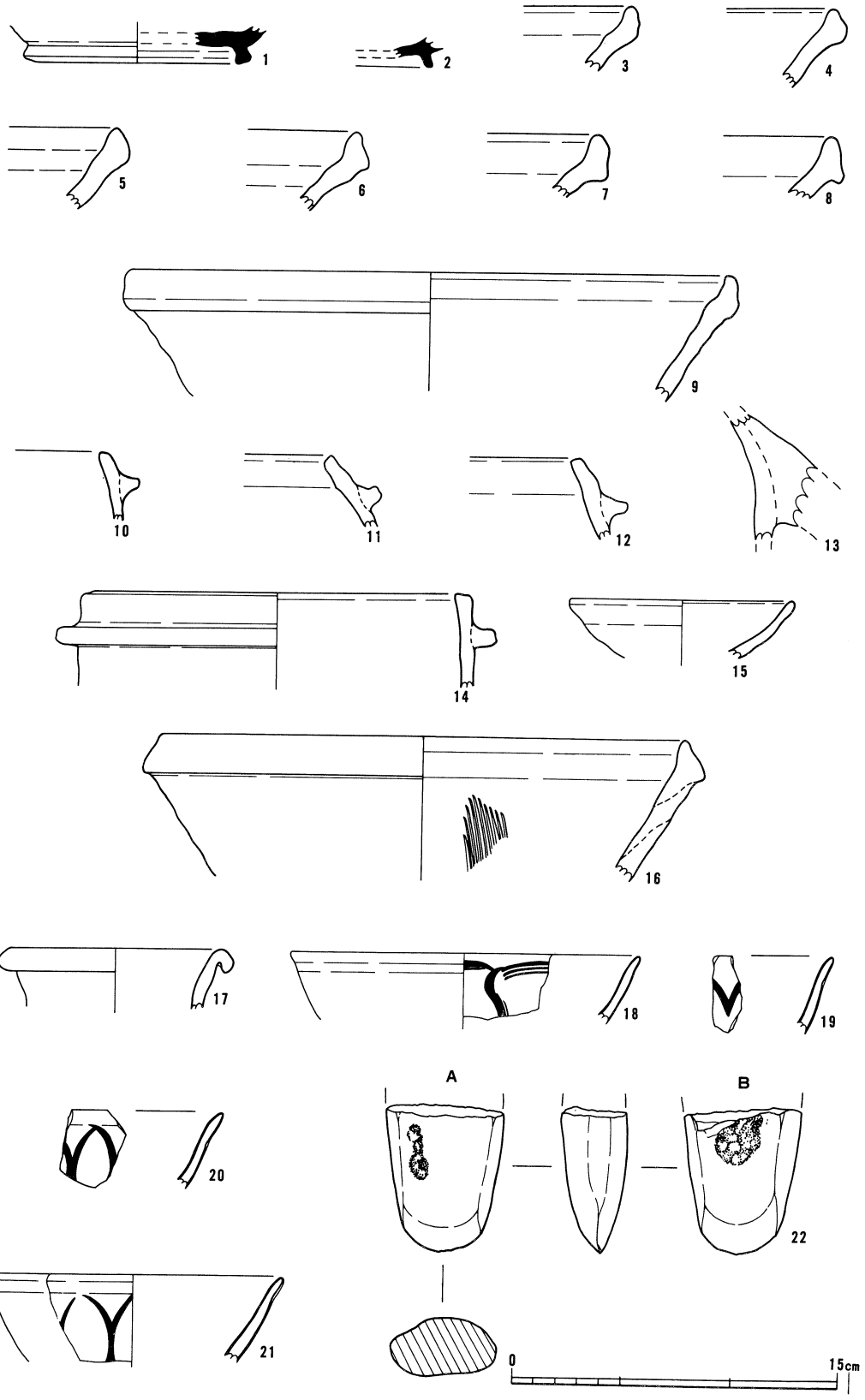
註1．大阪府教育委員会　『陶邑Ⅲ』　1978
註2．兵庫県教育委員会　『魚住古窯跡群』　1983
註3．菅原正明　「畿内における中世土器の生産と流通」　『古文化論叢』　1983
註4．菅原正明　「畿内における土釜の生産と流通」　『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所　1983
註5．泉拓良・宇野隆文　「京都大学農学部遺跡ＢＧ32区の発掘調査」　『京都大学構内遺跡調査研究年報』　1979
註6．間壁忠彦・間壁葭子　「備前焼ノート」　『倉敷考古館研究集報』　1968
註7．平出紀夫　「白磁四耳壺について」　『古代文化』　1983
註8．森田勉・横田賢次郎　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」　『九州歴史資料館研究論集』　1978

Ⅲ．要　　約

蛍池北遺跡第2次調査地点の概要報告をⅠ～Ⅱにかけて、記述してきた。宮ノ前台地は従来、弥生時代中期から平安時代にかけての複合遺跡であることが、発掘調査において判明されている。今回の発掘調査当初から先年度に調査を実施した第1地点が隣接する距離間に位置しており、関連遺構の存在も予想された。

しかしながら、今回の調査において検出した遺構は、中世期以降による攪乱によって遺構の残存状態が著しく損なわれていた。残存する遺構は、池田段丘砂礫粘土層を切り込んだ希薄な単一遺構である。出土遺物についても大部分の遺物は年代幅がもたれており、6世紀から15世紀にかけての日常雑器類が包含層内に混在している状況であった。遺構に伴う遺物は、殆んど認められず、遺物にも制約を受けていた。

以上、要約してきたが今後、宮ノ前台地において綿密な遺跡調査を実施することによって遺跡範囲、遺構構造が把握されるであろう。



第29図　第２次調査地点　出土遺物実測図

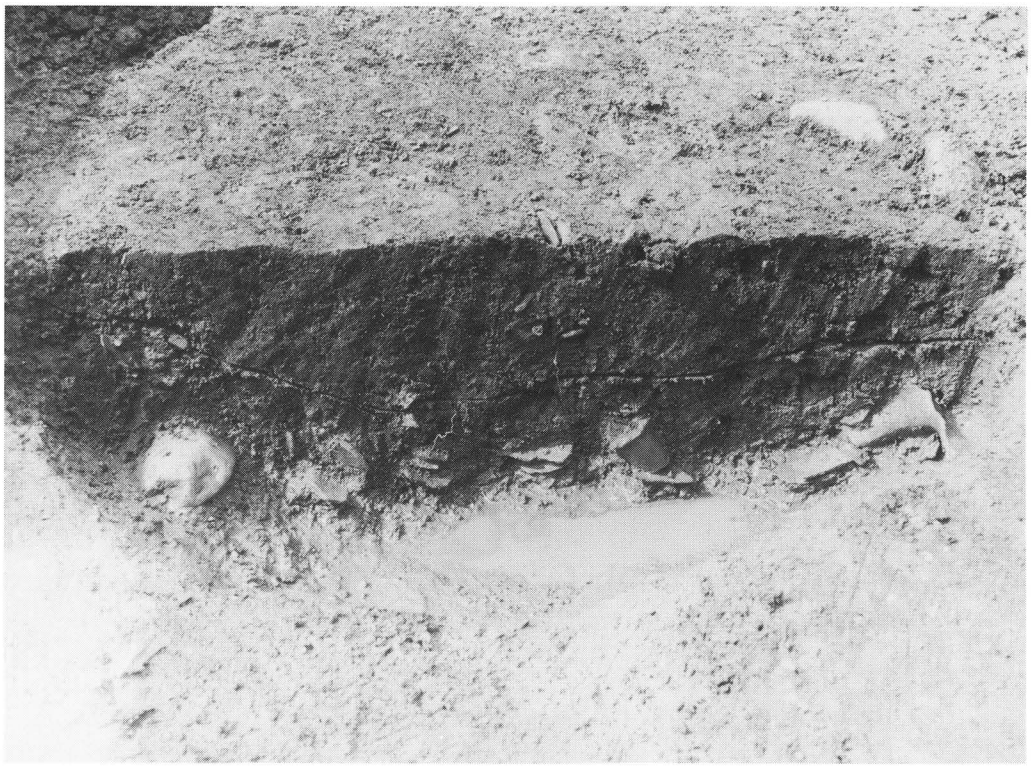
図　　版

(1)　第1－2トレンチ遺物出土状況

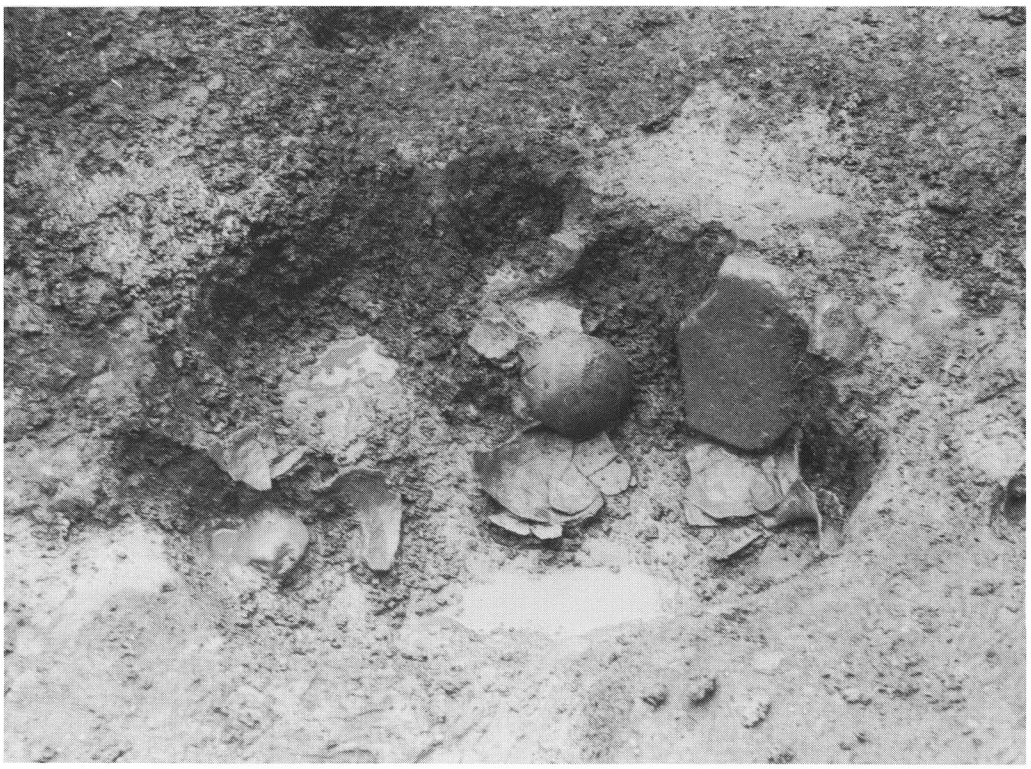
(2)　第1－2トレンチ井戸検出状況

(1)　第2トレンチ遺構検出状況

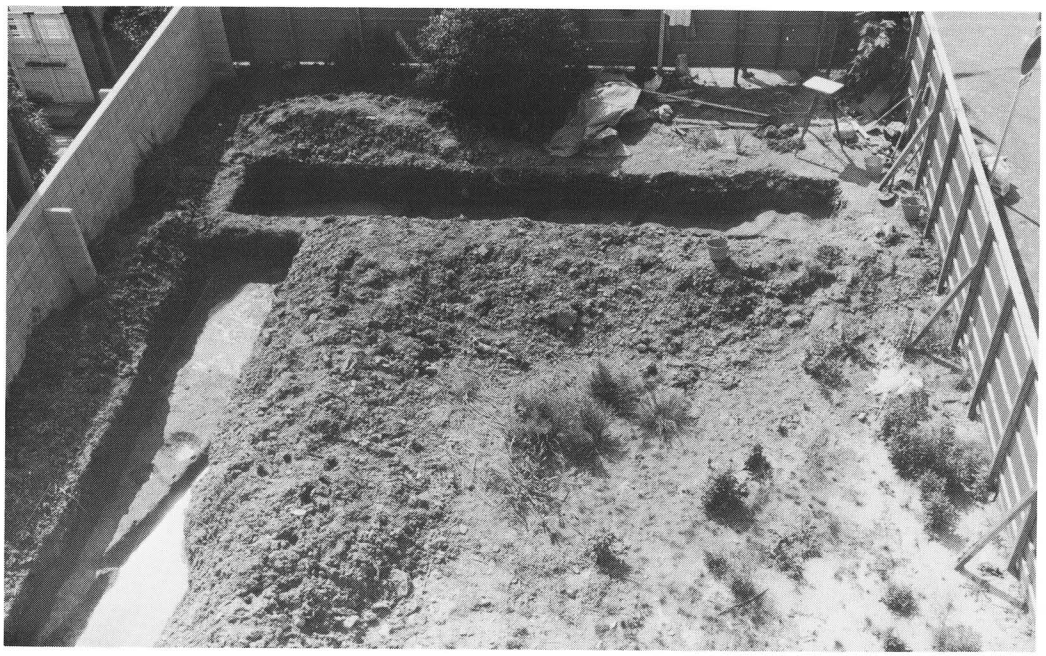
(2)　調査地近景



(1)　ＳＫ－02断面状況



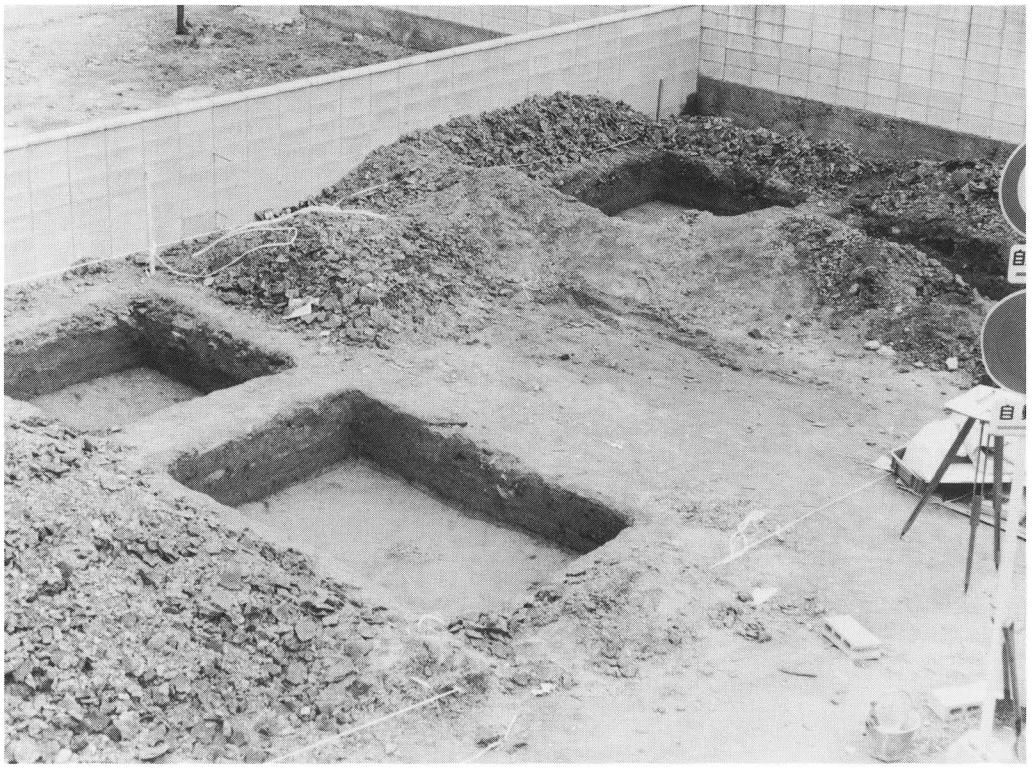
(2)　ＳＫ－02遺物出土状況



(1)　トレンチ配置状況

(2)　第1トレンチ遺構検出状況

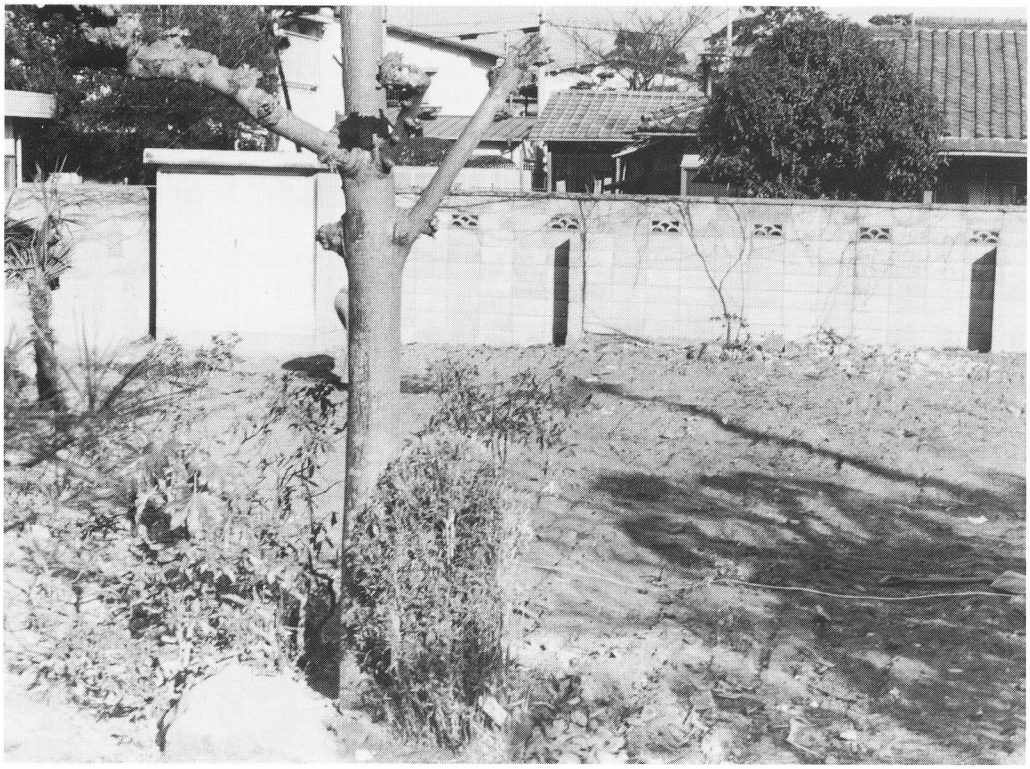
(1)　調査地近景



(2)　グリッド配置状況

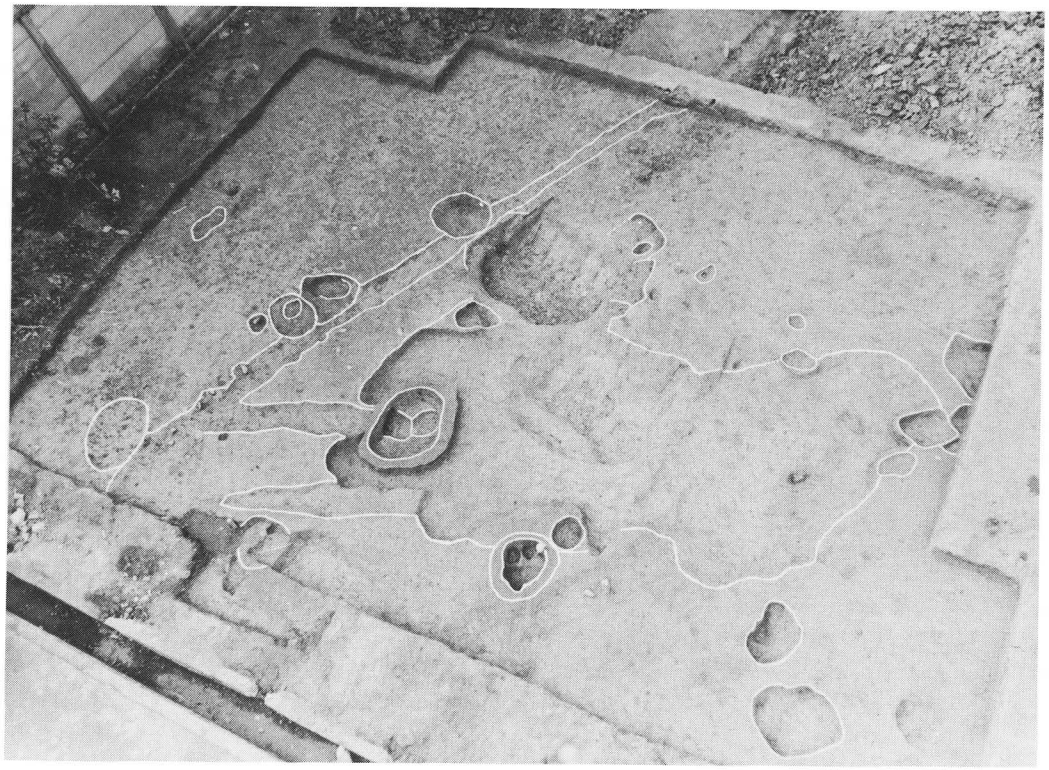
(1) 溝状遺構内遺物出土状況

(2) 溝状遺構検出状況



(1)　調査地近景

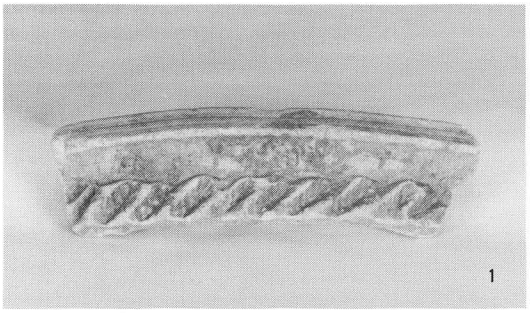
(2)　遺構検出状況

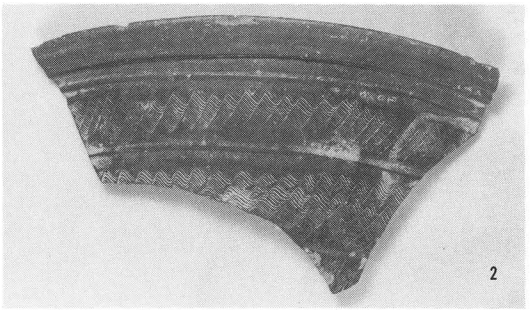


(1)　遺構検出状況（平面）

(2)　遺構検出状況（南方向から）

図版9 新免遺跡第4次調査地点出土遺物


1

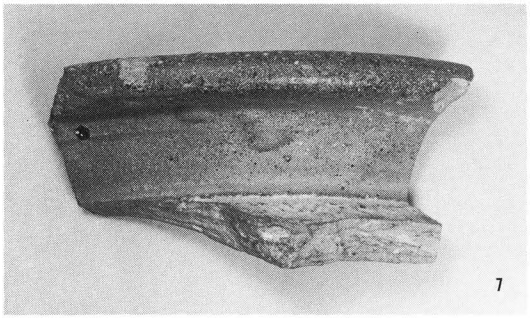

2

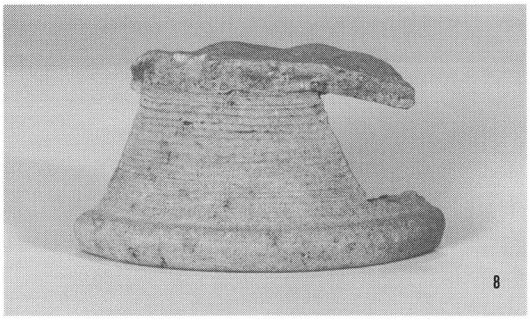
3

4

5

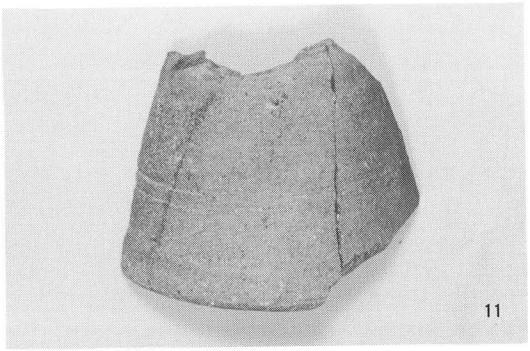
6

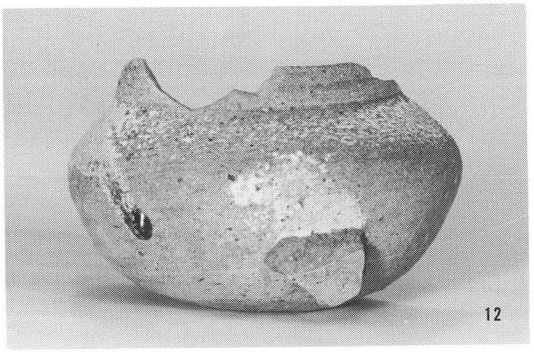

7

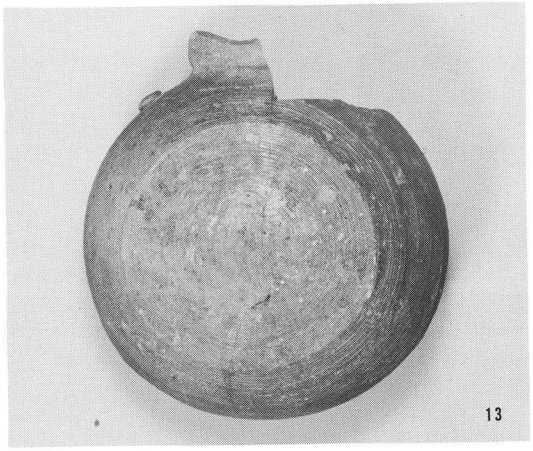

8

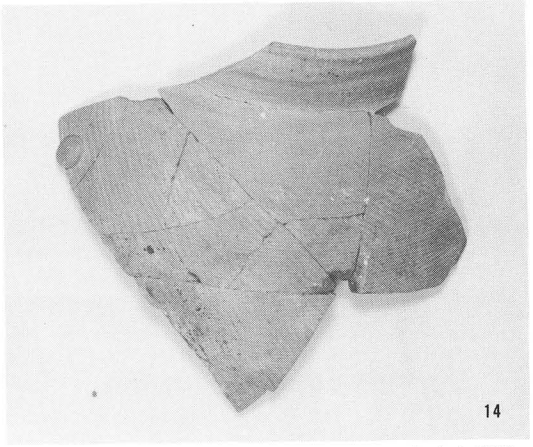
9

10

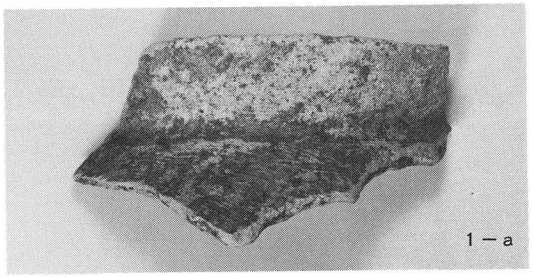


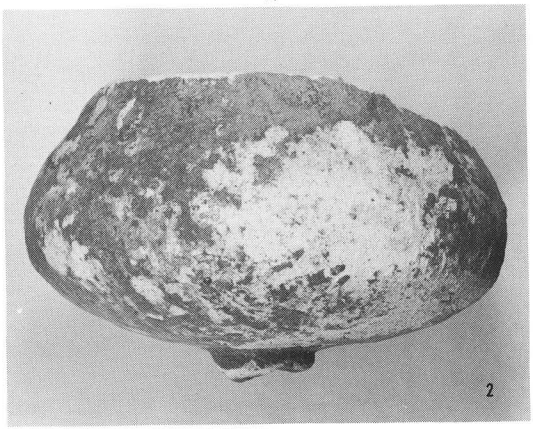


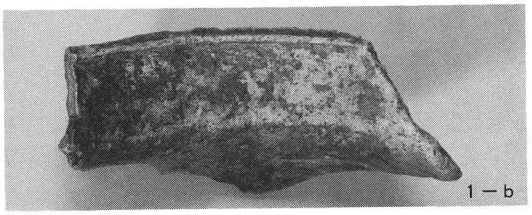


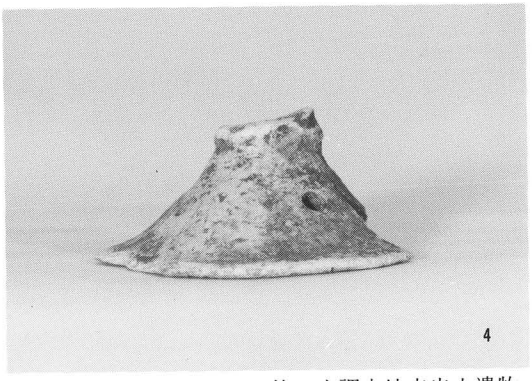


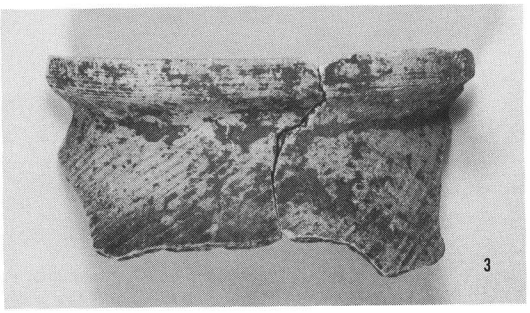
第4次調査地点出土遺物





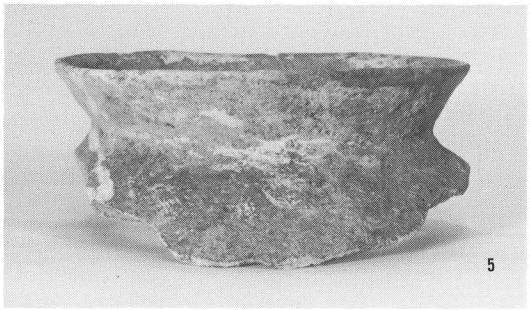


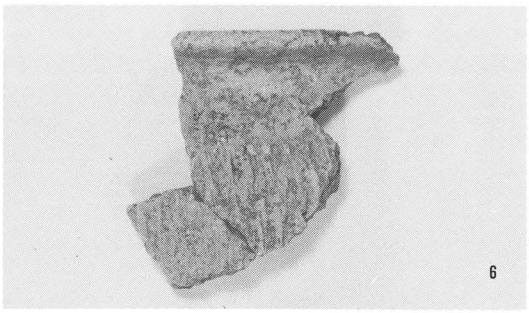


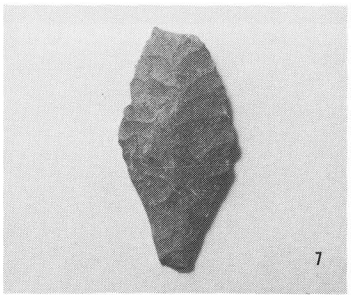


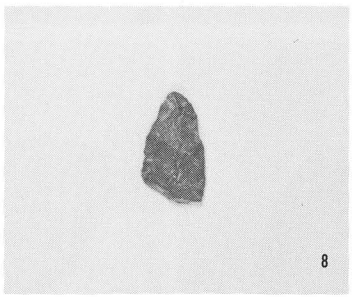
第6次調査地点出土遺物

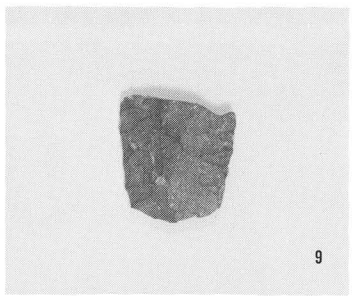
図版11　新免遺跡第6次・第8次調査地点出土遺物


5


6


7

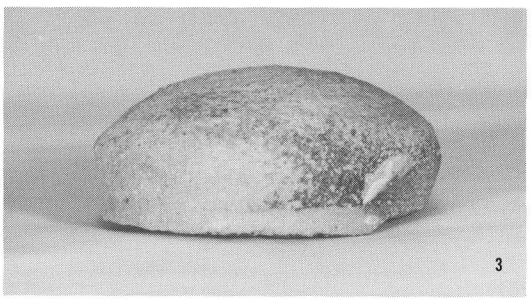

8


9

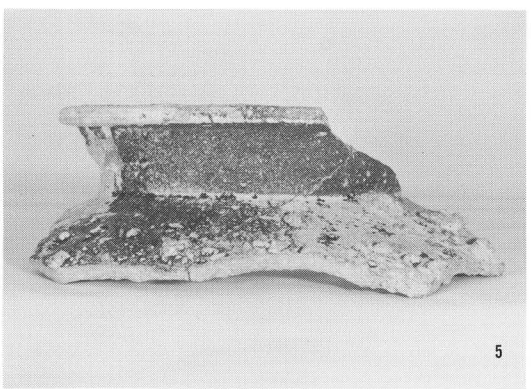
第6次調査地点出土遺物

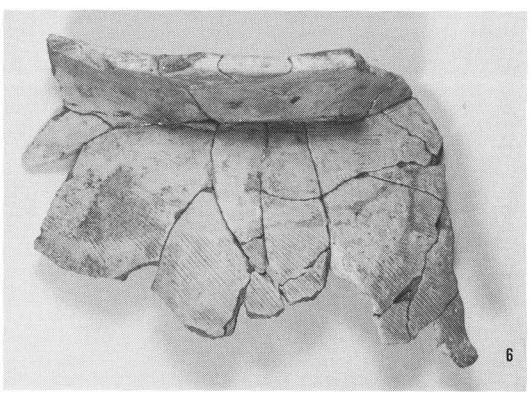
1

2


3

4


5

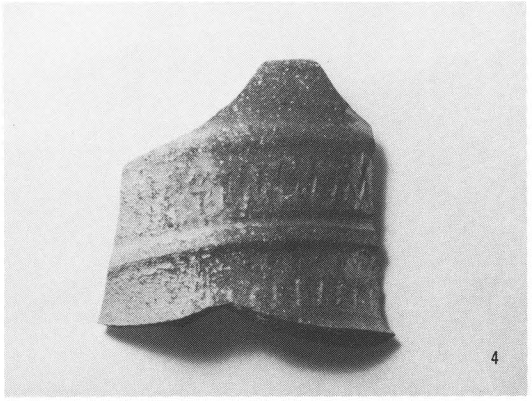

6

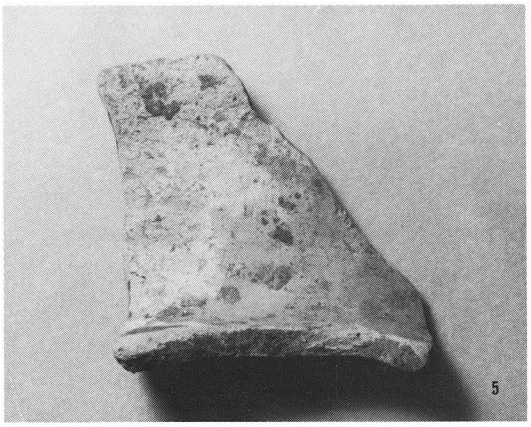
第8次調査地点出土遺物

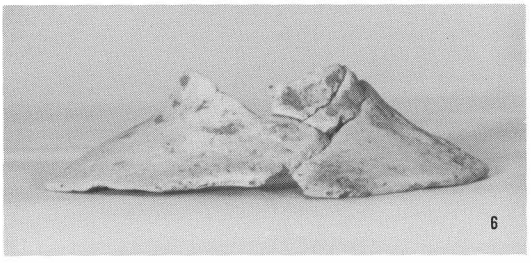
1

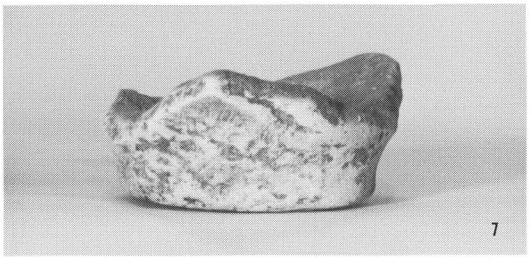
2

3

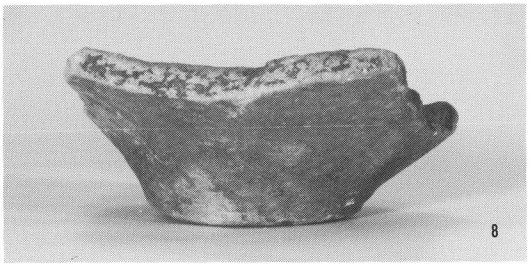

4


5


6


7

9


8

豊中市文化財調査報告第12集

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

１９８４年３月

発行　豊中市教育委員会

豊中市中桜塚３丁目1－1

編集　社会教育課文化係

印刷　やまかつ株式会社